

春潮抄

爪の色こよなし膝の春日影
貝殻の白さ夕べの春の雨
春の夜の闇に残れる寒さかな
いつまでも小寒き春を惜しみけり
静けさに堪へでこぼるる海棠か
森の冷え葉に湛へるつ椿咲く
我がはだへいとしみ撫でつ夜の秋
鳥影の落ちてよぎりし泉かな
髪刈りて目の大きき日焼の子
さし水にうなづき初めぬ浮人形
誰やらに似し顔をかしの浮人形
結綿の鹿の子の色の一筋かな
秋立つや水引草の夜半の筋
無口なる夫に仕へて夜半の筋
霧に溶くる木犀の香の強きかな

蛤は砂に眠るか星月夜
提灯を借りて戻りぬ秋祭り
栗落ちし音を落葉に聞きけり
蟲の音やみな我庭に生れたる
二日月松に見しよりしぐれけり
濡れて来る句の友ほしや小夜時
水に照る日の静かさよ小春風
静かさに息づまる夜の深雪かな
仁和寺へ朝の落葉をふみにけり
初風や我足音を砂に聴く
すこやかに子等が寢息や去年今年
笑みそめし子にもすゑたる雑煮かな
結初や心もとなきびんの煮か
雪に合ひて戻りし人の春着かな
庭に來し鳥の名を聞く松の内

ゆく春 井上千寒女

作務の鐘

いでたちの尼僧とものなし枯れ木作
枯木作務典座の魚板ひは誰々ぞ
枯れ木作務典座の魚板ひは誰々ぞ
ひゞの血のいで、乾けり枯木作りぬ
さゞなみにいゆきはゞかり精霊舟
ぬばたまの御船がかりかり魂送り
精霊船かたむきながらひかれけり
ふなべりに蠟涙たりぬ精霊舟
すたくとかつぎ過ぎけり精霊舟
まづしくも星まつるわが歌一首
身につきし博多帯しめ星祀
身帯しめてみたりに寒れ
春さむく脂粉まゐらす佛かけなり

職を捨て、歸郷する某教授に送る

春の夜を涙もらふて更しけり
春雨の博多は灯り君や行く
わかれきて袖の香ほのと春雨傘
ふるさとに住みつかすして苗代寒

伊深正眼寺僧堂

あささむの大釜の粥たぎちを
朝寒の粥へかよふ老尼かな
老主家のしはぶき給ふ粥座かな
秋涼や作務の果てたる鐘をつく
大霜の地のしづかに作務の鐘
寒固め大撮心は今日よりぞ
喜捨草鞋めいゝにさげ小春徑
小春縁大撮心は終り小春かな
寝忘れの今日あたくし小春かな

註——撮心のすみたる後又は大作務の後に雲水等に朝寝をゆるす事あり之を寝忘れといふ。

雲母 濱 千鶴女

餘花の雨

煎春餘こ夏五明よ山春草寢蛙醉子
藥の花らに月易べ吹の燒むのひを
の潮のへ入る雨るき炷に月父を待つ子
句ふ雨ゐる道ゝ町の色星のほりや明易かな
ひくる紅を涙のほきはきを歩の燈かな
家ゝ流しごととく滴れりりりりりり
ぬ空のて上り滴れりりりりりりりり
ちの低さかけりりりりりりりりりり
に目借時

人落寒格夕わか菊汐新朱葉清人フ
里葉卵子冷がた人の涼を柳水をリ
を踏咽少え前む形の香のたろす硯日中萩白し
はむ喉しのをけける菊人形の愁ひかな
な嵩にこけて鳴子浮いて過ぎにけり
れに歩ぶし猿を引きにけりりりりり
しよみをを取ら邪心地
りをををををををををををををを
の取ら邪心地

海蝶 島村千鳥女

病閑

苗札の文字のにじみや小雨ふる
葛櫻卓上の蘭花ちれ
初拾おかつば短く刈つてあり
更けてなほ燈りをるなり夏館
蚊帳のうちしづかに團扇つかひを
朝涼し井のなかのこゑこだまする
涼しさや八つ手の葉ごししぶく水
絹糸草に水あたへすぎあふれけり
絹糸草露をたもちてゐたりけり
提燈草の霧はれてゆく清水か
提燈草手に手に山をくだりけり
朝の月ありて吹かるゝ芭蕉かな
蟲籠に桑の葉ゆれがうつつるなり
桔梗にうづみて霧の音きゝぬ

蓑蟲の多き木なりと仰ぎたり
八つ手咲き木馬の子等は日の中に
海嬴の子に石きりの子に八つ手咲く
笹鳴や樂焼小屋のうらおもて

病めるとき八旬
小康

ふたとせの病今日快し初化粧
暑き日の疲れをのせし電車かな
目つぶりにて蟬を聞きゐる病閑に
生き死にはなべておもはじ蟲を聴く
いのち燃え凍頬の快にしたるなり
しんしんと寒氣にこゝろ冴えゆけり
月照らひ寒氣ひし頬に痛し
寒月はわが想念をきよらにす

開放療法

愛吟 古山千代子

橙苑抄

踏む水車遅速のありて日の永き
日のにじむ庭に陽炎立ちにけり
赤き屋根青き森雲雀上りけり
入梅あかりコートのはねを落し
そちこちと木にきく鉄涼しかり
浴衣きて女の老ひを覚えけり
灯にすいて何動くかや青簾
海知らぬ子の海戀へり夏來れば
空貨車のひとり動きす白雨かな
青田あり丘あり雲の白う飛ぶ
峽底や清水・石・岩にせかれつ
青すゝき吹きぬる崖の道しるべ
青芒さききはバス行く新街道
常夏や君が腕のかぼそかり
燦々と日の降り咲くは芥子の花

白日に咲きしカンナに蝶の來ぬ
雨に煙る新樹よそこは瀧小徑
墓標や朽ちたる椎に秋暑し
金屬の冷え持つ月のふけて來し
かゝり船灯のゆれうすき霧港
淋しらに佇てば萩さへこぼれけり
エンヂンの絶えまなき海秋晴る
月の瀬や水碎けては碎けては
月照るや空の碧さの眼にいたき
鳴けば鳴く虫あり土間の小闇が
秋立てる残照の空の色だにも
古行李やコハゼの取れし足袋など
初空や港がよりの船マスト
福壽草日を吸ひ黄色つくし
掃けばとて又掃くあとの落葉かな

黄橙 櫻園千代女

春霖抄

うすべりを敷ける圃や春の雨
いらんかると入つて來たり酔莖賣
蠶休や山の如く濯ぎも
お隣に留守をたのみて花の旅
下駄の緒のゆるみ心地や花
借りてある座敷に戻り花
ハンカチに腰を下ろしぬ松の花
橋欄に渡御まつ人のおひく
鶉飼見の乗合舟にのりけり
蝙蝠や子守のかへりおそきこ
活けてあるひめいはふぢは池の坊
縁先に戻り着きたる蓮見舟
老の身の面の包みて罌粟を搔く
藪の上は月に月の大淀よこたは
灯のなき燈籠や月明り

袴などあづけてのぼる秋の山
背負はれて出水の家に戻りけり
佛壇にすがり流るゝ出水かな
白き尾をのこして消えし燈籠かな
野々宮の鳥居の前を竹車
乳母車の二人でおすや紅葉狩
人形のかけによせある菊の塵
藪みちの岐るゝところ木の實降る
谷川を涉りて登る菌山
雪の上を遊ぶ白鳥よごれをり
探梅や枝にかかけゆく拾ひも
煮たきする壘廊下や避寒宿
とんで來し毬なげかへす焚火かな
出迎ひの友と逢ひたる落葉道
福飴のゆがめる顔もめでたけれ

山茶花 丸山綱女

自選句

初夢の通ふ寢呼吸のや梅が香
 初雞や總燈明の天滿宮
 初鏡荒れにしく顔に化粧粧哉
 銀色にまたたく星や彌生盡
 花盛御忌の鐘つき戀歌山
 春の夜の屏風に貼りし戀歌
 道行くに椿櫻と句を案ず
 芽柳と緋桃と映へつ池の水
 山吹や山を登り道のすがら
 喜壽祝句
 盛んなる老祝はなむ櫻鯛
 河鹿笛に河鹿鳴かせて端居哉
 金鳳華の十萬坪の遊ぶ若葉哉
 雨晴れの微風に遊ぶ若葉哉
 點出しに歩きし勞れわすれけり

夕歩きに持つて出でたる團扇哉
 雲の峰相争う湧くや雲の峰り哉
 沸々と田水が湧くや雲の峰り哉
 夕風に初老に入りし皮膚の秋色哉
 秋拾初老に過ぎ來つ秋拾色哉
 一夏を肥え咲て過ぎ來つ秋拾色哉
 水打つて咲く夕顔に寛ぎぬ哉
 夕顔の花ほどけ行く夜風哉
 草の實や百羽の雞を放ち飼哉
 時雨のや燃えさし歩いぶる釜の春下哉
 鶯笛を吹いて歩きぬる山小春哉
 麥蒔くに引いてしまひし大根哉
 山家より炭賣りの來る雪解哉
 大寒のよき味も來る燕か哉
 十人の酒鬼打寄りぬる年か哉
 忘

同人 川口つばな

下崩抄

下崩ゆる思ひまどかに籠りけり
日曇れば草萌の色消えぬり
交りや春蘭堀りて呉れしより
雛の灯の早や灯るまで遊びか
鶯の日もすがらなる雛おさめ
古雛の何か失せゆく雛おさめ
掌の中の乾けり櫻貝
一日の夕べの花となりけり
山吹を庭の真中に植えし子
つづくと春を惜しみて悔もなし
兎に角に暑さに弱く生れけり
物かげに一人かくれて涼みけり
大勢で借りし小家や月見
蛇の人の女あはれや猫が好
夏やせの女あはれや猫が好

村の子は裸が好きで瓜の花
旅日記すでに秋なり山桔梗
一葉して其の後の音のなかりけり
この夏もこの後に到れり法師
二階より物をな捨てぞ秋海棠
いつまでも娘可愛で栗送る
大惠那にいつも雲ある案山子かな
秋雨や蓑笠着けて庭掃除
またゝきをしておとなしや大根馬
このあたりに下谷藝者や枯蓮
冬ぬくしのらりくらりと生徒歸へる
残菊や家事にいそしみ句にあそぶ
吾が梅をおびやかし去んぬ深雪かな
初冬や宿の前の山後ろ山
枯蔓を引けばあらがう力あり

ホトトギス 高田つや女

玫瑰の後

川越喜多院
木枯の海鳴りに似つ縁日向

春浅き雲のかげりや山葵畑

萬歳のむしつて行くや壁のすさ

似解我意而不解
淡雪の握りても消ゆる掌

白魚の身の透きとほる二月かな

隣々と假屋こぼたれて人々散りゆく
さし柳芽ぐめるを置き別れゆく

リヤカゝに子の運ばるゝ春の暮

廿餘年住馴れし東都を母は病兄を伴うて歸郷す
春寒き雨ふッつける別れしな

別れて數句母の衰へ著し
蚊屋の灯に齒莖くぼめる寝顔かな

老母と病兄生別の餘儀なく
秋近き壘に涙踏み消やす

山居快々
夏山の蝶とぶ雨のわだち跡

すくくと花もたげけりかなむぐら

露さむや蟻螂のぼる竹の垣

閑棲
凍土の日にくづるを見てありぬ

柏原なる中村貫一氏夫人逝く、夫人は隠れ沼の如くひ
そやかにかなしき女人なりき、夫人の通夜をしのびて
春寒く組まれてあらむ水仕の手

亡夫人を偲び中村氏に申しつかはす
薄雪や戸口に消ゆる下駄のあと

無所屬 川島つゆ

花だより

故郷の庭の一木の花だより
猫柳挿すや流るゝ枝や遅櫻
山門をさえぎる花がく
案内する人や馬酔木のなつかし
招かれて去年の雛の町はづれ
物種子を賣るや田無のなつかし
菊の芽に佇み旅の話はかな
飾りたる雛にほしき灯かな
もろもろの石をめぐりて春の水
指さしてギリシヤの船よ春の海
香水の浸みの大きく旅カバン
雨しげくなりて金魚をかきけり
只一人山ふところの田植かな
早苗束傾かざるはなかりけり
夕焼の後片附をしてゐたり

眞白なる朝顔うりの日覆かな
傘さして誘ひに來り螢狩り
さしのぼる月に向ひて歩みけり
兩方の耳に蟲きゝ歩きけり
會釋して稻架にかくれてゆきにけり
双の手の見えとりゐる鳥瓜
蟲賣りに人の流れの止ら
避暑人の残りて去にし古すだ
打水のひろひて歩きや神樂坂
ぬくもりし助炭の上の置手紙
大いなる犬に曳かれて冬木中
山門の向ふ師走の人通り
片づけて子と遊びけり針供養
獅子舞の遠くは行かぬ太鼓かな
羽子日和よく續きけり由比濱

ホトトギス 今井つる女

青簾譜

初風や潮風寒き磯馴松
初賣の店に座りし女か
敷石にこぼす若水互にけ
初詣霜の石段登りけり
互てし手に溶く白粉や初
窓明けて眉引きにけり初
町内の花見に店を休みけり
お花見の留守居に伯母をたのみけり
出代のよくも肥えたる姿か
出代や負けぬ氣性の取廻し
燈影さす水に垂れたる柳哉
渡船待ち居る岸の柳か
水口を固め廻りぬ梅雨出水
茄子苗を倒して梅雨の出水
紫陽花や久しき雨に色褪せし

瑩追ふて草履落しぬ芦の
青簾後家のたつき賃仕事
洗髪乾く早さよ青簾
流燈の流るゝ迅き水勢哉
温泉の宿の提灯赤し流燈
流燈の消えて淋しや水の
やつれたる後ろ姿や秋
久々の鬘が重たき秋
自動車を避けて立ちけり花
水演や年老いてよりかゝり
思ふ事云ひ得て炭をつぎ足し
つゝましく炭つぐ指の美し
千鳥鳴く一夜を須磨のやどり
病み勝ちに過ぎにし年も惜しまる
雪の傘傾け合ひて會釋哉

同人 高橋鶴女

秋 曉

挿し終へし菊の芽青き月とな
空戀ふて鳴く鳥放て西行忌
晝いぶす煙を上げて夏蠶小
青 柚子に二番蠶は上る
來る鳥の來るべふ椿咲きにけ
木々根に躓き入りて苔涼し
山蟻に早やランプ吊る男哉
首振つて若蚊にいつか眠りけ
牡丹に遠き襖を開けたりぬ
咲き切りし牡丹の蓋の高まり
雀よりに賢し牡丹の蓋の高まり
生きて居る花一輪や微の宿蝶
月光に全き菊となくなり神あり
秋曉や古事記に生くる神あり
頼る時計腕に小さし秋の暮

家そこに見えて灯りぬ秋の暮
小春日や家居南に傾け
星屑をかぶりて菊の白さ哉
月の人あちらを向いて應へ居
土舐める猫いとほしや月の下
雷や引く戸に體はりつけ
縁側の半分を寝て日南哉
橋の影寫して雪に大河あり
冬の空は凜と船はゆるぎなく
天地の地はじれんとする霜の曉
夜は地を離れんとする冬
冬波の鋭角と寒なる艦を解
礦光と灯なる寒月の大哉
寒月や内灯よりは土月に應へなく
寒月や内灯よりは土月に應へなく

水明 高木てい子

水引草

縁障子病よき日はやゝ開くる
芽牡丹にとびつくり雪や覆をする
海山のかきくもさらなる千鳥かな
萩の雨ともしめてさら針はこぶ
山茶花やわが病みそめし日は遠く
おもひきや雪ふみわけてきませるよ
花蕎麥や朝の散歩は足袋をはき
病一句
月青みおもひやるなるわが家かな
欄にたゞよひくくるや春の雪
春の雪ふる日この部屋に降りし
うす紅葉の雨いたくこそよべ
永き日のくむとするに虫柱
春雨のやみしゆふとの虫柱
春雨のやみしゆふとの虫柱

暮れおそき窓のあたりの虫柱
むらさきに四方の霞みし夕かな
梅白し雨やみたりし夕まぐれ
山茶花やしづかなる日をおくりつ
山茶花やしづかなる日をおくりつ
山花やしづかなる日をおくりつ
焚きほこりあがるに童よるこべり
日おちて寒き紅葉と仰ぎ佇つ
みづひきや憤りしべばやるせなく
梅もどき雪をいたゞきさゆれをる
朴若葉おのもくにしさゆらげり
雨空のつひに降り出し牡丹かな
遅月の出でゝをりけり稲架の陰
松の木に鳩居て翔ちぬ秋の天
なにとなく見たり庭の遅日かな
みにたりし庭にありたる遅日かな

かりたご 野中てい子

横濱抄

地階の灯春の雪ふる樹のもとに
街の音とぎれる間あり草萌ゆる
噴水や東風の強さばかりなほり
くもるととき港さびしや春淺き
花曇昨日の船の今日はなき
中空にとまらんとする落花かな
紅毛の館をあげておそ櫻
白扇の上昇するや昇降機
さみだれや船がおくるゝ電話など
更衣ひとの煙草の香の來るも
朝蟬や運河の波の船は遠く
晩涼や運河の波のやゝあらく
ガソリンと街に描く灯や夜半の夏
潮あびの溺れし沖を巨き船

末子急患にて入院五旬

夏布團病篤ければおとなしく
短夜のほそめくし灯のもとに
病院の廊下鏡の夜半の夏
さみだれや窓にとなり煙出し
いっつも誰か夏の氷室にうしろ向き
梨食うぶ雨後の港のあきらかや
稻妻のゆたかなる夜も寝べきころ
もろこしを焼くひたすらになりてゐし
工場のまいつのもこの音秋の雨
噴水のましるにのぼる夜霧かな
横濱にすみなれ夜ごと夜霧かな
起重機に夜毎の霧や寒くなる
しばらくの霏にぬれし林かな
襟巻やほのあたゝかき花鋪のなか
慈善鍋晝が夜となる人通り

ホトトギス 中村汀女

七夕竹

つぼみもつ梅のづわえや初詣
初空や浮き出しやうに山見ゆる
野の東風に久しくあるや水仙花
末黒野のかすむと見ぬる日暮かな
夕かすみ蜺の籠に芹を摘む
貝寄や浪花華に近き浦に住居
野にむけて雛かざりある座敷かな
穂麥野に藤の盛り家の見ゆる
苗代田は糸引き渡し美しくし
いにしへや若葉の奈良の盧遮那佛
艸山のかげになりゆく日傘かな
もと径へ螢を追ふて出たりけり
眞青な葉についで毛虫かな
紫陽花は雨にほつてく藍の玉
金魚こそどこに入れてもうれしそ

夕立のあと艸深く眺めけり
雲の峰いくつも舟の通りけり
珠の數玉に初秋風や雲の色
朝の海に七夕竹を流しけり
小舟の遊ぶす七夕竹の波間かな
むれ遊ぶ秋日の中鳥の足
勅りの人なまひ給ふ菊の日
鳥渡る人なつかしくゐる夕べ
いろく鳥鳴いてゐる山紅葉
黄落の深き眺めや粟田御所
芦の穂に冬のきざし白さかな
招提の末枯萩に霜の鳥
刈り込みし茶畑なだらかに京の冬
鴨の聲雑木の畑の中寒さかな
汐の香のするみちにしで椎拾ふ

倦鳥 眞城貞女

霧しぐれ

針 供養 蒔 繪 の 匣 を ひら き けり
花 見 舟 夕 日 の 岸 に 舫 ひ けり
お く つ き へ ぬ か り 路 なる 落 花 かな
ひ と む ら の 篠 生 に 野 火 の う つ り けり
晴 れ ぎ わ の 雨 美 し や つ ゝ じ 垣
木 瓜 の 咲 く 日 和 舟 垢 波 み ゐ た り
行 春 の 三 味 線 草 も 咲 き に けり
百 合 匂 ふ 垣 根 の 闇 や 竹 床 几
露 叢 や 薄 暑 の 雨 の 音 た て
七 夕 や 古 な き な ら ひ に 髪 濯 ぐ
靄 深 き な か に あ や め の 濃 紫
水 底 に 火 影 の と ぐ く 鶺 鴒 川 かな
篠 懸 の 暗 の 風 よ き 浴 衣 かな
願 ほ ど き 龜 の 子 放 す 夕 べ 哉
揚 舟 の 中 洲 や 月 の 水 雞 鳴 く

は ら く と 傘 打 つ 雨 や 行 々 子
雷 す ぎ し 蘭 田 は 夕 日 の そ よ ぎ かな
青 芒 雪 累 々 と 湧 き に けり
歸 る さ の 鬼 灯 ち ぎ る 子 な り けり
鶯 鳴 く や こ ゝ よ り 路 は 下 り 坂 (丸 沼)
草 紅 葉 こ と に 汀 の 美 し き (奥 日 光)
霧 走 る 黒 髪 山 や 花 す ぎ
ミ ズ ナ ラ の 根 に 寄 す 波 や 赤 蜻 蛉 (中 禪 寺 湖)
霧 し ぐ れ 虎 杖 の 花 ま し ろ なる (谷 川 嶽)
霧 に 曇 る 眼 鏡 拭 ふ や お こ ま 草 (八 ヶ 嶽)
爽 かに 遠 嶺 隈 ど る 日 の 出 かな (乘 鞍 岳)
秋 光 や 岩 ふ み し め て 峯 に 立 つ (乘 鞍 岳)
末 枯 の 鉢 片 付 け も お は り けり
裁 ち 物 に せ ま き 納 戸 や 冬 支 度
襦 袍 着 て 橋 ゆ く 人 や 天 の 川 (上 高 地)

さつき 大橋てる子

木の芽抄

朝起きのよき癖つけん木の芽時
さゝ濁る雨後の小川や鳴雲雀
打返す麥の裏葉や風光
開墾の鉄すてゝあり雉子の鐘聲
霞む野に溶け込む山の寺の鳥
裏山の日永領しめて百千鳥
花茨野川しづかに流れ居る
堰きとめて田へ引く水や水馬
空赤う染めて五月雨降る夜かな
すゞしさや皆露持ちて畑のも
短夜や夢に入る人起きる人
鶉篝や霏にぼかせし金華山
語り合ふうからやからや盆の月
芒か増せし小供の部屋や秋櫻
建て増せし小供の部屋や秋櫻

鳴啼くや梢はなるゝ朝の霏
夕風に穂波立ちけり落し水
句碑古りて道もあやなし野菊咲
大霧を衝いて電車始発かな
うとみ見る犬ほゝづきの赤さ哉
末枯を來て新宿の灯が眩し
物の實のから鳴る音や秋の風
さゝんくわやはしき小女の頬に似
藏へゆく渡り廊下や花八ツ手
初雪や引き残しある菜の上
北窓を塞ぐまで薪積上ぐる
風に鳴る程になりたる干菜かな
榎埃拂ふて澁茶すゝめけり
温泉の町を包んで暮るゝ時雨哉
暮れて尙大雪となる夜の静か

筑波 伊藤とう子

近詠

魚山の名こゝに千年冬木立
雪雲の亂れて星のこぼれそむ
大雪の朝戸まばゆく操りにけり
風呂の湯も雪を沸して雪籠り
幾竿も襦袢凍てをり藁廂
故老爐に大原雑魚寝一くさり
いっの間に女四十か木の葉
大原の星は明るし残る雪
残雪の山相寄りて村を閉す
冴返る山星をちりばめ枯梢
残雪の山徑岐れ墓地に入ると
早春の風比良からと比叡から
雪杳を干してこの家も人をらす
大原や再びきてきびし小町かな
椿埃かぶつて老いし小町かな

古りも古る煤天井や爐火明り
故郷の湖の匂へる白魚かな
白魚の箱の霞ヶ浦の繪よ
陽炎や夜のまだ雪残る玉垣に
おぼろる夜の釣籠遙かに寝残る
おぼろる夜の釣籠遙かに寝残る
客に傘さゝせて舞妓の春の雪
花の茶屋かにかく守りて十五年
轉や雨雪に古りし繪天井
陽炎や幽かに跪坐の雨菩薩
女院像木の芽明りに麗しき
夜霧濃し寂光院の灯が見ゆる

ホトトギス 小埜徳女

涙痕

秋の空愁ひあつめて澄めるかな
 情知らぬ女にさむし秋の風
 戀無くも人は生くる歟秋の風
 立つやすぶろに人の戀しけれ
 蟲哀し別れし妹生み親
 月今宵よしなき人を思ひ居る
 身に入みて強き女になりけり
 秋夕魂飢えて歸るなり
 露草は空にもまして青きかな
 露草はつぶら眸に似たるかも
 風は想ひを遠くへ誘ふ夜半の冬
 日毎暗き空より落つる木の葉哉
 紅き花つけていとしも寒椿

春宵の男は弱きものになん
 春の燈に涙見せじと背き居る
 春愁の晝を夢見て暮すなり
 春愁や人若くして「主」は嚴し
 春恨や痴者神を求めつゝ
 半生の悔ひ新たにる給哉
 青春の哀れを秘めし給哉
 更衣哀別離へて恥多き秋哉
 更衣人永へて恥多き秋哉
 若ければ人な嘆きぞ初給哉
 白百合や神に召されし悪魔來る
 短夜や疲れし夢に惡魔來る

火星 一一川 トシ子

千葉より

便利屋のもたらす寒の目刺かな
餅ぐすりほのく火にあぶりけり
冬帽子積る日向に埃拂ひけり
降り積る日除の雪を拂ひけり
立春やふみかたまれるみちの雪
甘藷蔓を起しつ畑の小春かな
ちりくると鯨の肉をさらしけり
松納め手元あかりとなりにけり
すごろくのあとの座敷を掃きにけり
早春の御物に博物館かゝる埃かな
うつろなる埴輪の像や春寒し
ゆく春の高野豆腐をもらひけり
はびこれる垣の内外や草いちご
住み古りし薬師寺内や針供養

抱かせる樟脳包みや別れ雛
街道は小田原ちかき櫻かな
据風呂にいさゝか菖蒲はなちけり
畫蛙菖蒲も末となりにけり
草市や小雨の中の夫婦もりの
生みの親育ての親や魂まつり
着おろしのセルも祭のあした哉
箱膳に少し残れる干鱈かな
對給四ツ身着る子の二人かな
七面山四句
山の坊夏曉の膳につきにけり
足元に蝶のとびたつ登山かな
山險し瀧音せまるばかりかな
駒鳥の鳴いて深山の茂りかな
灯に映えてかたむく影や花氷

さつき 平川とみ女

丘光帖

あか／＼と桃咲く山と野といはす
一樹あれば春寒き風聞きにけり
三尺の雪に埋れて彼岸かな
起臥しも賑かかに雛飾りけり
病臥二句
花開くやうな風音日々聞いて
花散るや夜明けしまゝの静けさに
残雪や深山鴛鴦瀧に來る
燕來るや明けつけの土間住居
雀の子樟を離れす育ちけり
風鈴の舌つけなほす夏來たり
豌豆も挽ぎ頃の燕飛び馴れて
箱根仙石原
山陰はまだ枯蘆野五月か
南風や仔馬いづれも同じ丈

黒部猿飛奇勝

眞ツ二つの峽へ降り込む夕立かな
鳴焼や西日消えたる臺所
鳳仙花種吐きつくす秋來たり
秋立ちて棚の糸瓜の伸びすぎたり
放牧の馬も相寄る秋の風
一つづつ星降りかゝる夜寒かな
雁鳴くや水島あたり夕焼けて
海女が髪束ねもあたり踊りけり
築守りて鮎もさびたり冬隣
コスモスの日影をみだす時雨かな
初霜や菊と寄りくの畑づくり
放牧の馬寄る水も潤れにけり
總落葉して大空に百舌聞かす
凍雲や風に追はるゝ鴨の聲

東炎 富岡登美女

浅春抄

元日をどこまで晴るゝけしきかな
神杉の光りしづけき大且
初鴉日出づる方へたち初
海よりす早春の筋つかいて初
竹鳴らす早春の月かゝり
早春の光りにぬるゝ杉穂か
如月の日に片照りの秀枝か
春寒く座れば遠き松の
朝晴れの木々早春の光り
川浪やかそけくゆれて露の
露の葦花となりけり風し
山の秀水の朝夕の澄む二月
春浅き水も夕べのひゞきか
月の光引き合ふ木々や冴返
伸び悩む芽のいとほしき餘寒かな

竹の秋うしろは深き空のいろ
水は日ののきらめき淡し
水は仙の句へる手桶古りにけり
水は日句の明るさたりも猫柳
雁歸る迅さ遠嶺の晴れもよ
猫柳活けて雨夜のゆとりかな
残雪にやせたる水の遠さあり
紫雲英空より淡き遠ちの山
初乙鳥山は明るき日ざく
山里の家しづもり秋ざく
枯れ初めし草に入る日の弱きかな
ゆく秋の日はふくみたる芝生かな
うつろなる水に應へて冬の星
冬の雨音なく芝生暮れか
冬の雨暮るゝにはやき問屋街

南柯 大林杜實女

松花集

蝌蚪の水いまだし芹を摘む人に
雨きよすだまがもこもる花をわぶ
遅日はつ陶師の小窓ひくかりき
蝶翔ちてうつろの窯に日たふ
紫の萱は穂あげぬ言道忌
風二つはふりの空にもつれあふ
はふり路の雲にたゞあり風白く
潮光りの消ぬるはふり路風をあぐ
たまゆらの風のかさけくはふりみち
松蟬のこゝだなきゐて塔ふりぬ
塔長り紋白蝶の天降るあり
曼陀羅は古りぬ残花の日にあれば
青き光は尼像の肩にそのまみに
花冷えにゐて葛城の嶺をもとむ
砂さめて濱晝顔の花をとちす

夏かなし檻のけものはみは白く
夕焼の匂へりこゝに穂萱さむ
たまむかへ港におつる日にそみて
たまむかへ港におつる日にそみて
荒草にこぼるゝ火屑魂おくり
月くだち胸像の青消えにける
鶏頭の空は鈴懸の實をえたる
窓を拭く眼に落葉の音かすか
ハム作る窓に流れ牧場枯る
そこはかきとラヂオの流れ葉追ふ
うそさむき牧に緬羊落葉追ふ
まをらんの鋭き葉さしぬ冬空を
まをらんと冬菜と青き日のもとに
彦山丸遭難後の日
海哭けりはふりの人等面を伏す
灯凍てゝ火葬のけぶり夜につゞく

天の川 吉田登女子

蟬の羽抄

火 取 蟲 秋 草 書 宿 庭 月 木 戸 限
蟲 なく や む く は 月 の 庭 の 木 戸
水 を と る 糸 瓜 と あ は れ き ら れ け り
長 き 夜 や 短 檠 の 火 を ち と 鳴 く
山 畑 に 落 つ る 夕 日 や そ ば の 花
鹿 の 聲 餅 に ひ ぐ 谷 間 か な
落 し の 水 田 川 に か け し 水 車 か な
朝 風 の 稲 田 わ た る や 落 し 水
紅 葉 鮒 も み ぢ の 鱸 を ふ り に け り
秋 晴 や 小 鳥 下 り た る 櫟 原
こ の ご ろ は 風 吹 か ぬ 日 も 落 葉 か な
藪 卷 の い て 夕 月 寒 き 軒 端 か な
蓑 蟲 の 枯 木 を わ た る 日 南 か な

朝 風 や み こ の 朝 顔 も 咲 き か
宵 や み の 空 す れ も 咲 き か
羅 衣 や そ の 空 蟬 の 羽 の す き 通 涼 し
柸 の 花 こ の ぼ れ け り 暮 つ か た り
寒 袖 に つ め た き 鼻 を う づ め け り
寒 菊 や 霜 に や け た る 葉 も あ は れ
も え 上 る 薪 の 能 の 役 者 か な
春 な が ら 寒 き 灯 影 や 夜 そ ば 賣
白 魚 や か た み 晝 の 袂 紗 な つ か し む
棕 櫚 の 葉 に 深 山 の 晝 の 風 の 光 り け り
鶯 の 巢 川 深 山 の 晝 の 風 の 光 り け り
柳 鮠 田 川 の 堰 を む れ て ゆ く
枝 川 や 四 ツ の 手 に か り 柳 鮠
空 豆 の は や 鐵 漿 つ け る 日 と な り ぬ
雨 は れ の 垣 根 に 萩 の 若 葉 か な

木太刀 堀田伴子

落椿

初雲のあまねく照りて松ばやし
初雲を生みつゝ海のたひらかに
初渡舟のよきぼる堤が鶏の中
正月のよき日つゞきや神詣
砂をふみ春日よろしや芝を踏み
梅に來て徑はてなく春あられ
下萌やこみちわかれ寺のみち
春雨にひねもすするや落椿
花曇り蝶々水にしるきかな
村々を歩き大和のかさみ哉
落ちつけば涼しくなりて糸とんぼ
やどがへの勞れになりがむ夏の川
炎天に小笹のそよぎ寺の庭
大阪城
城石のほめきを顔に太閤忌

母となりて人の祭のうらめしく
夕立をよるこび棹しぬ舟遊びく
雨は埃りの白雲を飛ぶ秋の蝶
すな埃りの中に野菊の高さかな
天の川句會の山を降りつゝかに
蟲の夜や崖に眺めて有馬の燈
萩の露雀はつばさぬれてたつ
てのひらに拾ふ木の實の若さ哉
寒椿朝に夕光に目白居る
かれ草に風光りけり紅葉
夕ぐれの寺内しきりに散る
奈良おん祭
おん祭篝火の火の粉芝の雨
黄落や社火の火の粉芝の雨
隼のあざやうかしるの粉芝の雨
峡の晴れ

早春 永尾友女

湖畔抄

ひとりゐのひるげに通る時雨かな
二階のがらす眞蒼に霧のあがりばな
驛の階段雀がのぼりゆく寒き
さす手ひく手に水かげろふのたつてゐる
朝風の網の白魚四五ひきづつ
なく雲雀空にかげろふうつるなり
わが影に今は入りゐる水すまし
花きちかうすべにの爪きつてやる
浪くぐるこの身はもこどもうみしなり
つれづれは栗むきためてゐたりけり
霧が霧追へり橙ま青なる
霜の藻屑ひとつの波がもちゆきぬ
耳に落ちし雪ひとひらの溶くるみゆ
吾子やはや小さき雑煮に坐りたる
紅浮いてしまふ寒夜の鏡見まじきを

家うらは寒き風棲むに逢ふなり
山の貌そこ川霧立ちこめぬ
朝寒き子の涙吸ひとつてやる
人をいみて龍膽霧におされけり
凍る葦津鳴らし雁のわたりけり
吾子のかなしみ雪だるま雪に沈みゆく
雪の垣越すはかなきお日をたよりけり
雪に影す八ツ手大きき夜をつかみ
月あまねし葉末にひそむ蛾ありなむ
うつつなの身にじゆすの實も鳴りもすれ
葡萄うるる夕日を紙に通はせて
白粉の香に立つ秋を知りそめぬ
みとりゐるにいなづま胸を刺しにけり
子の椅子も並べ蚊やりを焚くことも
梅雨あけの月影に人寄つてくる

石楠 白田登代子

草の香

わたましの月夜となりぬ花片々
外人のおくつき寒し花曇り
行く春の薬玉白きお厨子かな
棲む魚もなく水騒ぐ二月かな
紫陽花の雨やひとり月の薄化粧
東京驛頭にて二句
御幸拜す民炎天に聲のん
日盛り天地閑けき御幸かな
押花の風に破れし曝書かな
秋來ぬと友の水莖しき
かなくによき夕山となりけり
記念堂にて
供華買へば釣銭あつし震災忌
父新盆
草市の草の香抱いて戻りけり

お迎火焚きそめし町を戻りけり
靈棚に灯して涼む母子かな
草の穂の向きく秋來りけり
活けこぼす豆柿かたし十三夜
秋惜しむともなく日向歩みけり
あをぞらの風が泌みたるシヨールかな
晴れつゞく川波立ちぬ枯柳
糸卷にホ句書きとむる師走かな
どの墓もよき日當りや年の暮
枯野ゆくや身に泌みてきし日の温み
獨りゆく日に眠氣さす枯野かな
抒情人形の影の細さよ夜の雪
雪の峰天國突いて晴れにけり
雪の山わたる天日空深く
しんくと山の日は泌む深雪かな

曲水 山崎 豊女

鉢ほづき

ちゝはゝに身ほとりたりて寝正月
にほやかかにちる白粉や初鏡
その中の比丘だまりたる歌留多か
鳩笛に二月の女嬌笑す
なまくと寒紅梅の夜色かな
もの思ふ襟に落ちくる寒さかな
相よりて寒雑炊をすゝりけり
バラ色に寒の玉子のわられけり
わが名づけし某氏の息女、香萌の命日一句
きさらぎの日に古る小さき卒塔婆かな
故郷の父病む一句
眩やいのちおとろふ日向ぼこ
かきたてゝ夜半の埋火たのしめり
子の母となりて一句
そひぶしの枕になれて春に入る

活けまぜて梅雨の野茨ほのしるき
から梅雨の虫焼く臭に風ゆる
日のきびしヨットは赤き帆をはりぬ
風に伏す合歡の稚花かなしかり
花づゝに晝顔からむうすぐもり
實ざくろの紅のあまさをかみにけり
さやくと別るゝ蚊帳の萌黄かな
朱闌けて鉢菊ほゝづきのもがれけり
つくくと鉢菊の黄もふるびたる
柿一顆こづえにうれて海ある
こほるぎの闇に風たつ宵の口
知人の愛嬢逝く一句
魂いづこ人形の袖の秋の塵
まどろみて秋の日和をたのしめり
なでつけて婢のたしなみや師走髪

俳句通信 犬塚なほ女

糸柳句鈔

眞鶴の雪のうなじに初日影
ひねもすを囀りくれて草おぼろ
山近く轉りを聞く日中かな
茶の木畑晝深うして頬白なく
三千院
きのふけふ櫻となりしくらしかな
つばくらの野よりの人のひるげ
この水の清きにほたる住めりけり
行水や青田つゞきに山低き
鳥の聲老鶯もまじるなり
水鳥は水に粧ひさつき空
葉がくれに蝶のひそめる泉かな
かりそめのうつはに蚊やり線香かな
菖蒲草ふきしあまりを湯にむすぶ
うちむかふ人のそなへの扇かな

きりぎりす秋になりきと途すがら
コスモスの露の上なる秋の空
たのみ得る人と暮しつくれの秋
金魚浮く水に秋風立ち初めぬ
里人は月の出しほを寝入るなり
云ふすべを知らず薄に立ちつくす
嵐してよりの静けさ扇おく
山茶花や女ばかりの晝にしよ
冬の雨池に見る日のわびしさよ
鳴く千鳥霜のひゞきの交りけり
とく起きて霜に寒菊きりにけり
暗きより入りて火桶に炭をつぐ
山時雨來そめて櫻落葉かな
月明りして山里は時雨けり
里人の雪あつむるに交りけり

雁來紅 野田なみえ

松籟

松籟に暮れはてゝ居る雛かな
夕月に春めく心秘めけり
朧夜をはしゃぐ吾子と門に出
春曉の雲かげはたと暗きかな
父の鬚さびしく光り日永かな
春の雨昨日も今日も夕餉時
セルの人の肌白さにさびしけれ
うら若き御僧にぬきしビールかな
松の花風雨となりて眼のあたり
岩の色いよ濃く出て夕立雲
睡蓮や雲にも濃く出て夕立雲
竹に吹く風大いさや明けの蚊帳
涼み出て白靴の子のかけまはる
日でり雨我が子の髪をぬらしけり
支那町に祭の花火盛んなる

桔梗の濃き紫を愛すかな
ちゝろ虫風をおそれ泣きやみぬ
風出でゝ芝白光となりにけり
色黒き子よかけて来し芒道
學校の近くに住みて九月か
茸狩にあやしき男うちまじり
秋晴れの芝生を歩む今日の幸
犬呼べば月夜の土の濃かりけり
黒髪にい橋の光ぞまばゆの
冬晴れに雀の群や十月二
夕べ鳴く雪の餉のたのしま
街に住めば雪の音も冬ふけて
かたくと障子の音も冬ふけて
黒雲の天おそろしや寒雀
厨の灯うけて寒水呑みほす子

鹿火屋 別府ぬい

みちのく抄

會へるよりに別るよ心春の雪
春泥の俤にあれは夜深し
冠とりてくつろぐ雛となりけり
春眠や駒の脚音枕べりに
風船賣心もとなく渡しけり
ふりむける脊にせまりぬし櫻かな
足もとに來てしたしけれ春の波
盛んなる山吹に戀ふ蜥蜴かな
移り住むこの家に近きついでり
雨後の陽の睡蓮に燃えうつりけり
三尺の柩までもりで明易き
乾きたる水鐵砲の盥か
庭に咲くは多摩の河原の月見草
棧橋の東明けたる海月かな

昭和三年七月長男寛を失ふ二句

紅ダリヤ朝のダンテに捧げけり
みちのくは二輛の貨車に月見草
はた風やおくつきのお苔木賊色
秋雨のさきを歩むは誰れ人ぞ
一叢の芒に都はなれけり
この葉髪玉につくりて捨てにけり
若き日の釋迦の御像や秋の晝
奥山の色にそまりしあけびかな
ぢんのつうや霜月の鐘きゝながら
雪の路わかかれば細し報恩講
埋み火のねむるが如き小春かな
金の壺抱くかに花や水仙花
水餅の水のつやもちふくれけり
くぐり戸の音のしばらく返る
思ふことなくて焚火の焔かな

鹿火屋 太田のぶ江

春曉句抄

春曉の疊に火燵出しにけり
春晝やひよこ入り來る垣のひまり
用ためて毎日花に遊びけり
野游や羽織かためて持たさるゝ
隴夜や火鉢にかかけし貝の鍋
肩を打つ杉の雫やほとゞぎす
涼しさに黒き羅著けにけり
羅の膝に涙を落しけり
火事明り曉の蚊屋染めにけり
川風にゆれぬる蚊屋を外しけり
こほろぎや燈火もるゝ倉座敷
露寒やおそき月出る倉の
一月漸く傾き見せつ露寒
一行寺櫻の一枝紅葉づり
水にひゞく鳥の聲や散紅葉

水に沈みて色美しき紅葉哉
水仙の水硯の水も氷りけり
江戸解の火燵布圍や紫に
もたれ合うて居眠りぬるや置火燵
圓き鼻の頭かくせるマスタク哉
うどんやの焦げし疊に坐りけり
玉子酒すゝめて君をかへさじな
たはぶれの言葉や過ぎし玉子酒
男山にて
初日待つうしろに神樂はじまりぬ
絶間なく神樂聞こゆるどんど哉
猿曳があけて行ききたる障子哉
舞猿が肩よりに覗く焚火かな
寶永駕や膝に重ねし袖の互
觀世水に染めし正月小袖哉

同人 石原初子

津谷集

夫の手に玉虫が
ありわれむなし
ひとつぶの野
苺を手に愛で
つゆく
一輪の薊を持
ちし手が疲る
香港十句
商館も船も眞
白き日覆張る
高き厦日覆の
白きを暗くし
花市のあした
の花覆花にほ
ふ
日覆灼け花市
の花香にむせ
し
花市の薔薇の
にほへりチエツ
鶴ゆくに
日覆の街の花
市にいま果て
し
駕ゆけり街の
日覆にわがち
かく
街の樹のみど
りにちかく駕
着ゆけり
緑蔭に顔くら
くなり駕着
きぬ
駕着けり緑蔭
にしたり地に
降りぬ
船發ちて白き
日覆に煤降ら
す

船ゆきて日覆も
波の上ゆけり
日覆なきボト
は天の下に吊
る
機關室海より
低く夏日さす
船の路晝寝の
ころは島絶え
し
晝寝覺め青き
潮路にわが
たり
晝寝覺め兩舷
に島來り去
る
船橋に夏の日
低くなり没
る
木犀の花久し
きに雨降らす
木犀は部屋に
入り來て夜
もにほふ
秋灯洩れ樂の
音洩れてゐ
る芝生
神戸外人墓地一句
白菊に白き寝
墓に夜が來
たる
吸入のこの部
屋の鏡見す
過ぎぬ
風邪の顔おそ
れ町醫の俤
更けて通る
風邪はやり町
醫の俤更けて
通る

馬酔木 山口波津女

母のみたまに

今 は 血 を 捧 げ ん 春 灯 明 う せ よ
淡 雪 の か そ け き 音 に 呼 吸 か ぞ ふ
淡 雪 に 呼 吸 は 絶 え つ つ 掌 の 温 き
春 曉 の 死 の ま へ に し て 安 け さ よ
鳥 邊 野 や 暮 れ な づ む 路 の 春 の 泥
春 雪 に 着 つ る 黒 衣 高 低 に
七 日 の 間 春 雪 日 日 に 有 り 春 寒 し
許 す こ と の み の 寂 し さ 春 寒 し
母 なら ば 怒 ら じ と 花 む し 春 寒 し
春 愁 の 消 ぬ 日 頃 空 は 唯 あ り つ
兒 を や り し 野 や 霞 ま ん と 思 ひ 縫 ふ
夕 霞 む 戸 叩 く 句 會 の な ぐ れ 哉
身 の 憂 さ は 晝 を 寝 る 也 彌 生 盡
禊 園 會
禁 し 井 の 神 祇 の 井 筒 今日 開 く

鉢 の ち ま き 飛 鳥 の 如 く 投 げ に け
木 綿 四 手 に 雨 細 々 と 潮 浴 び す
廣 胸 の 垂 乳 の 群 や 節 節 作
漁 女 の 眉 濃 の 女 節 節 雲 ぐ
漁 女 や 眉 濃 に 翳 す 夫 戀 ひ
言 荒 き 節 作 り 女 も 腕 を 夏 雲
鮪 突 く や 眞 橙 の 腕 を 夏 雲
黙 々 と 田 や の 草 男 話 と そ ひ け
田 草 男 や の 貢 の 話 と 絶 え が ち
焦 れ 伏 す 田 田 の 草 男 兒 等 思 ひ
懷 遠 く 田 田 の 草 男 雲 を 見 思
田 の 草 の 歸 り を ま つ や 小 金 貸
採 蓮 の 露 に 明 石 は 縮 み け
見 る ま ま に ぐ づ る 蓮 や 舟 の 中
河 骨 を 握 る に 舟 は 流 れ け る

懸葵 平林はつ女

春曉抄

笙に吹く風寒く雛仕舞ひけり
建國祭祝ふや假装舞踏會
鶯の鳴く風に洗ひぬ櫻炭
春たけし風強さよ蕨狩
梅咲きて練習船は發ち初
漱石の高き墓石と初櫻
衿かへて初夏の宴にはべり
仲見世や涼しさ光るかざり
苗賣の節の中なる糸瓜店
花笠にさかしまき町の子供
紫陽花のあせてしまひぬお化
鈴蘭や静かに居れば匂ひ來
笛吹いでて雲をはらん月今
降り出でし雨に虫鳴く子規忌
ぐづつつけける四萬六千日の空

吉野太夫の住みし高臺寺なる茶室を訪ひて二句

虫鳴くや開け閉てしぶる吉野窓
蜘蛛の巢の軒に家ぬちの蟲の聲
萩散らす風は昨日も今日も北
三日月か五日の月か水寒し
蘭田を來し吉備津の町や廓あ

北海道士別にて四句

詩を秘めて雪の曠野の果もなし
踏めば鳴る根雪の月に戻りけり
つづけある旅につきくる雪女郎
馭者の酔檣の手綱に見られけり
式に行く子に大いなる初日かな
萬歳は二階の客に囃しけり
なづな瓜子供の手よりつみにけり
一つ買へば一つ添へけりお年玉

ゆく春 室積波那女

梨の花

瓜 上 げ や 中 の 二 つ が 競 ひ る て
釜 す る か て 大 車 座 や 小 豆 粥
鳥 追 の か ぼ そ き 姿 影 を 引 く
あ た た か き 臥 床 に き き ぬ 寒 念 佛
水 仙 花 土 の か た さ に 咲 き に け り
水 仙 や 葉 焚 く 煙 あ び て 咲 く
寒 に 入 る 障 子 の 外 の 風 を き く
火 桶 抱 い て 話 相 手 の ほ し き 夜 ぞ
遠 足 の 子 見 え す な る ま で 門 に 立 ち
植 ゑ 代 へ て 色 な き 松 や 春 寒 し
朧 月 淡 き 木 蔭 を ぬ う て ゆ く
子 の 留 守 に 張 る 乳 い た し 春 の く
臥 す ほ ど も な き い た つ き や 梨 の 花
摘 み す て し げ ん げ 流 れ て 川 暮 る
植 ゑ 更 へ て ま ば ら に 咲 き し 櫻 か な

と み か う み 牡 丹 の 蕾 か ぞ へ け り
若 楓 あ る か な き 遊 び の 童 か な り
柿 若 葉 ひ と 紅 り 茶 や 庭 つ じ な
縁 先 に 運 ぶ 紅 茶 や 庭 つ じ な
も ぎ 惜 し む わ が 手 作 り の 茄 子 か
失 ひ し 歸 り の 路 や 夏 の 窓 草
薫 風 や 装 ひ な り て 立 つ 窓 草
現 は れ し ひ る 寝 の 人 や 四 葩 咲
更 衣 つ い で に 髪 も 結 ひ に け り
病 中 三 句
残 雪 の 櫻 に き た り 中 禪 寺
鶯 を き く 旅 路 に き し 國 言 葉
う ら ら か や 旅 路 に き し 國 言 葉

蘭の花 乾花女

暖日抄

初荷馬あはれ瘦せしが勢ひつよべ降りし雪そくばくや鳥總よ永き日や弓の狂ひを矯めにけり煮物の香あまき厨や春の山々の霞あみつきし夕渡さしかけて春雨傘の小さき蝶の影水あれば水傘にひらめき蜩殻捨てたる藪の梅寒相剋のこゝろつめたし白碓椿濤あらるき日の風に堪庭々沈丁の香に掃きめぐり薫風や頻きりに鳴いて十姉軒菖蒲よもぎは萎れ盡しけりたまくに櫂の風や鳴る轍

阿夫利嶺に雲こそかゝれ麥の秋蚊帳の夢曉けの潮風通ふなり木場の月蝙蝠ひらとかすめけ上げし筵の水したるや花茨棕栢の花咲きこぼれたる日數か今朝秋やこゝの泊りの茗荷今暑し穂草のひまの虫の繭霧冷えや灯に顔よせて地圖をみる通る人こち向けと引く鳴子かな秋扇二泊し鶉の鳴かばと思ふ粟畑の月鶉の鳴かばと思ふ稲の花風さらくと晴れあがり火を焚けばうしろ風ある冬田かないなめのめ烈しき雷や神の旅木兔の聲風音の中に聞えけり

高潮 小嶋はま子

野路の秋

大藁屋すこしゆがみて初御空
ひそかなるけはひもありてもの芽出づ
まなざしにかろきねたみの雛かな
掌にのりておとるや春の水
病人と言はれてさみし春ごた
紅ひもをつけてもらひぬ摘菜籠
灯の下に尼も有情や花疲
とく紐の紅まつはるや花疲
ひぢ枕の女もすなる花疲
道問へども言はぬ子や花曇
子も疲れ母も疲れ蝶まし
宵静かけけるけけると遠
野茨の散りこむ水に田を植ゆ
かたまつて仔犬は白し朝曇
走馬燈よくて廻るほど留守さみし

打上げて花火の上の花火かな
挽きやめぬ柚にのうぜんよく落つる
飛んで来し霧かむばせに吹きわか
後れ居て一人がさみし野路の秋
美しき尼のかなしき秋彼岸
長雨に萩よごれつ咲きにつまみ
つまみ菜の露まみれなる一つまみ
紅葉宿さしみのつまに紅葉かな
鹿を見る居れば時雨るゝ旅路かな
時雨るや佐保川ほとり鹿とゆ
屏風の繪何や屏風のはなやかに
古りつつも花鳥屏風のはなやかに
よき部屋に花鳥うする火桶かな
掃きうつる箒の先の冬日かな
冬木影浴びてけはしき女かな

玉藻 植田 濱子

好晴

鬢かくや春眠さめしまゆおもく
花衣ぬぐやまはる紐いろかな
晴天に苞おしひらく木の芽かな
うらのかや齊き祀れる瓊の帯
丹の欄にさへづる鳥も惜春譜
藤かざす宇佐の女禰宜は今まさ
雉子なくや宇佐の盤境禰宜ひとり
春おしむ納會利の面は青丹さび
無憂華の木蔭はいづこ佛生會
ぬかづけばわれも善女や佛生會
灌佛の淨法身を拜しけり
むれおちて揚貴妃櫻尙あせす
朱欒さく五月となれば日の光
天碧し膚橘は簷をうづめ咲く
糖黍かぢりしころの童女髪

母と寝てかごときくなり蚊帳の月
枕つかみて起き上りたる晝寝かな
薫風や釣舟絶えす並びかへ
月の下のかきわけゆけど
青芒傘にほとぎすほしいま
こだまして山ほととぎすほし
葡萄くらし顔よせつくする夕鏡
蔓たのし葡萄の美酒がわきすめる
霖や泰山の木は花墮ちず
相よりにて葛の雨きく傘ふれし
菊つむむやや廣壽の月といふ新種
菊つむむやむれふす花をもたげつ
つみうつる菊あかるさよ籠にあふれ
領布ふれはへだたる船や秋曇
寒風に葱ぬくわれに絃歌やめ

ホトトギス 杉田久女

亡父にささぐるのうた

芍薬の芽を守るものよよく古りぬ
はたくを追ふ聲ゆけり草の日に
はたくを追ふ目に汐のおちやます
はたくを得しあらぐさに海を聴く
二科展をみはてぬころ朱欒買ふ
二科展をみしたかぶりを街あるく
瓦斯暖爐父逝く鳴りおもざし淡く變りはつ
瓦斯暖爐たち夜をよもすがらみたま守る
瓦斯暖爐今日は燃えすよ部屋うつろ
亡父を送る日
はふりゆくみちのべのもの芽ぶくなく
我が瞳はも潤れてはふりの雲を追はず
土寒くかききし枢おろされぬ
寒風に合掌の手をとときあへず

壁の圖の今日はあらく試問場
テスト待つ廊下に影とゐる少女
大いなる壁を陽はゆきてテスト終ゆ
冷房のきさはし白き陰おけり
冷房の壁畫は晝の翳湛ふ
冷房にひびかふ聲音の白かりき
冬さうび胡粉とく眸にあそびぬ
はるかなる雪をおもへり胡粉とく
雪を描くころ熟れつゝ胡粉とく
胡粉塗るころ正しくまむかひぬ
大阪十合屋上園
ポイントセチャおさなきものゝ幸にふれ
メリーゴラウンド動かす今日の凍雲と
漫畫グループ展
冬眠の蟻のベッドを地に描く

天の川 青木比呂

四季雑花

初空やちか／＼日ざす硝子越し
 正月やしつけ糸とる灯の下に
 標の二三残りてすたがたし
 初午の尙賑やかな赤き色
 湯崎にて
 春南に母とくらしし五日かな
 ほつとして火をかきたてる春寒し
 夕ぐれに見た草焼の大きさや
 大は雲雀ばかりと思ひ刺串
 鱈はま松に付きたる鳥賊の墨
 魚が手がぬくうあたらし裸かな
 わがからやぶツと裸でくらしかな
 朝家の柿は五尺の茂りか
 我家の柿は五尺の茂りか
 小鱈う走りるが如く通りけり

柿の葉のうら返りして夏嵐
 泳ぐやうな小鯖二つや秋暑し
 秋の雨貰の煙出てゆまきぬ
 提灯がをちこちにして秋まつり
 居處のかわりてゐるや虫の聲
 これからしも咲かんとするや
 冬らしき風になりたる汽車の笛
 寒き夜やしんとしあてゝ夜はぶし
 ほゝべたを火鉢にあてゝ夜はぶし
 なんとなく付て厭はぬ葱の土
 寒月や餘り静かに人の家
 乳はる男使や十二月
 外へ出れば師走こゝろに變るなり
 年の瀬や舟もきれいに植木鉢
 隅にある炬燵に物ののせやすく

倦鳥 新川ひろ子

麥笛抄

雨降ればすぐに出水や曼珠沙
築山に芝生にもあり月の椅
倒れ木の振りに分けり夏の草
流星の尾を引き捨てし黍涼
だしく橋一つふえたり紅葉の
茶屋の橋一つふえたり紅葉の
花すみれ細きうなじをたれあへ
老梅も二三輪咲き咲き終る
群れとんぼまつはる舵をとりけ
饅頭の火のおとろへしまゝ夜なべか
踊唄ことはり言に終りけ
落したる扇を踊る手にもたす
踊唄終り一圖に舞ひ冬にけ
凍蝶のたちて眞白禰宣の宮
ひれ伏して

山椿みな蕊だして開きを
大すゝけして破れざる蠶家障
のせてある菖蒲吹かかるゝ庇か
灯のほととにまだ柔かし走り
麥笛の頬ふるはして上手かな
一日の避暑ものたらし月見
睡蓮の蕾伸よし二つづ
塵取に剪られし菊の時雨を
雪づきん被りて小さき大人か
枯蔓のきまれ靴磨きつゝ除隊
今日もまた靴磨きつゝ除隊
霧の海頂ちかかく来てゐるか
草刈の吹かかると草のこぼれけ
負籠の吹かかると草のこぼれけ
櫻茶の花玲瓏と開く

玉藻 小川ひろ女

初富士

初富士に雲を納めし樹海かな
はだか灯に餅花ゆるゝ高さかな
からびきし裏白が鳴る玻璃戸かな
春の月ローラスケットする子かな
おほらかに大地踏みしめ野の遊び
富士裾野にて

野遊びや紅輪沈む大樹海
餘花つゝむ山霧迅き那須野かな
那須

朝霧の餘花ふるわせて卷きにけり
風浪の牡蠣粗朶打つや浅き春
いみじくも蕾もたげし堇かな
石垣にゆれく咲くや花堇
寶塚動物園
早春や豆鹿の脚折れそうに

潮來

早春や夜をこめて磨く貝ボタン
春の夜や微風さそひし太白星
新涼の空蟬ゆるゝ葉末かな
日没の富士巒あらし鳥渡る
大地打つ雨の亂れや蟲の聲
長谷にて

通譯に異人うなづく牡丹かな
蕊けつて蟲飛び去りし牡丹かな
月濡るゝ四條河原やソダ水
硝子器の葡萄青さや温室作り
吉野紙の透けてうるむや寒の紅
水郷は無限の空の霜夜かな
ひよどりにお山は澄んで寒きかな
友滑べる斜面はるかや雪晴るゝ

曲水 岡本芙久女

牛禮讚

鬼 薊 牛 が 首 木 を づ ら し ゐ る
短 夜 や 子 を 産 む 牛 に 燈 を か ざ す
短 夜 の 牛 が 双 子 を 産 み に け
萩 の 風 に 涼 み 顔 な る 犢 か
蚊 の 夕 べ 面 桶 で 量 る 牛 の 麥
牛 乗 せ し ト ラ ッ ク が 行 く 夏 野 か
鳳 仙 花 牛 が な め ゐ る 背 の 疵
曼 沙 珠 華 柴 つ け る 牛 と 舟 に 乘
鷄 頭 花 牛 は す な ほ に 瓜 切 ら 乘
風 呂 に く べ る 牛 の 荷 鞍 や 秋 の 暮
柿 紅 葉 ぬ が せ し 牛 の 沓 吊 る
夕 時 雨 ぬ れ き し 牛 に 藁 を 焚
初 夢 や 牛 燦 然 と 金 の 焚
覗 く 禮 者 を 見 知 り 顔 な り 小 屋 の
買 初 の 荷 鞍 に 鼻 木 添 へ く れ
ぬ 牛 角

瘦 牛 に そ は ぬ 荷 鞍 や 炭 を 積 む
石 路 の 花 牛 が 痛 が る 首 木 す れ
冬 木 立 す り し 牛 の 荷 つ け な ほ
牛 乗 せ て ゆ く ト ラ ッ ク や 野 の 時 雨
水 仙 に 牛 掃 く 刷 毛 を 落 し け
二 月 禮 者 に 生 れ し 犢 み せ に け
子 を 乗 せ て 牛 が 戻 り ぬ 春 の 暮
麗 か や 犢 を つ づ け て 野 を 歩
桃 の 花 鞍 解 づ 牛 の 野 を 歩
柿 紅 葉 口 籠 つ づ 牛 の 口 籠 の 背 顔
野 游 び に ひ ろ ひ し 牛 の 口 籠 か
五 月 閏 古 鋸 で 牛 を 梳 け
山 小 春 炭 に 焼 く 木 を 牛 に 積 む
冬 木 立 背 の 藁 食 ふ 牛 叱 る
籐 で 編 む 牛 の 口 籠 や 楢 明 り

同人 田村房女

吾子のうた

子をうたふ
天高しをさなき素足地におどる
春めく日毬蹴る子らの影を生む
をさなごのぬる夜はながし山火燃ゆ
摘草に乙女も倦きし口笛ふけり
學徒畫く枯木の空のあをく
みどり子を末のたよりや天瓜粉
寒彈のかなしきあそびざかりかな
玄海受験のため長男を京城にやりてのあるゝがかなし蒲團干す
花に長男受験中きてほこらの神にねぎごとを
入學の吾子頭の大いななる
みほとけの草餅すでになかりけり

晝蚊帳をくゞりて産の見舞ごと
子とたのし焚火にやけし芋を食み
芋をやく焚火したてゝ子とつどふ
奥企救の國
企救の女の喪髪にのせし馬刀の桶
馬刀の賣の雨やどりせる馬刀を買ふ
馬刀の賣の雨やどりせる馬刀を買ふ
玄海あるゝ窓あり雛の間
椿咲きおくつきの春めぐりきぬ
春めくや沖ツ白浪寒けれど
船音絶え防風の花闇となる
布さらし河原なでしこ咲く中に
雲もれ日枯れし柳の地にはなく
花にきてよめなをつめり古妻は

天の川 佐藤普士枝

蕁抄

庭に出るジャケツ著にけり冬薔薇
這入りたる木戸を閉しぬ冬薔薇
笹鳴や松の向ふは女學校
ラグビーを見て歸るなり木々芽ぐ
薔薇を剪るそのうち炭がおきるなり
春山の雑木の中心の人々
近道をし洗濯物は娘の春の山
たんぽよや洗濯物はとりにこま
草むらに薔薇のわたは落ちにけり
山影や蕁の湖の真中ま
今行きし自轉車の向ふ蕁採
湖の櫻の下の蕁採
郭公が來たり去つたり蕁採
望遠鏡鳩や浮くか待ちにけり
毎日の蕁を採りて日に焼けぬ

郭公の日はな一日蕁採
小骨なる擢をあやつり蕁採
河丹雪熊の船頭煙草嗜ま
牡丹雪の朝やおもちやが屈きた
大雪の朝やおもちやが屈きた
くゞつ師の通りてゆきし磯あそ
岩道を通りてゆきし磯あそ
蓬つむむ向ふに大き雪の備師
汽車くれば家がゆるるよ猫柳
暖かや毎日は何か草を植ゑ
はこべらの花がたくさん濯ぎも
生徒來ぬ先生雪を掻いてを
牡丹雪ふりゆつくりと掃除かな
春風や誰かの帽子木より落つ

玉藻 高野富士子

菖蒲笠

除夜篝うつる鳥居は波の上の
のぼり來る大きな月に街灯
春雨や旅の衣の氣易さ
炭かまの口ほつかりと春の
みたらしに來て脇に抱く破魔
笹原の徑のむかふの春雨の
病み臥してしづかに在るや
桐一葉はねてすぎゆく芝刈
千代紙の箱を持って來ぬ木
壇の浦の古り屏風に泊りけ
巫女も出て遊ぶ渚や羽子日
ゆき合うて錦帶橋に御慶か
三味の音と千鳥のこゑと避
千鳥なく夜のたのしき避寒
パラピン紙透きて眞紅や冬の
ばら宿宿

誰も居ぬ縁に袋の針を三寶
膝ついで供養の中なる納め
三寶の塚の遊びぬる納め
針納めして遊びぬる納め
ぬりかへて白き汽船や
紅白の綱たばねあり花の
篝たぐや片手に鶉繩たぐり
菖蒲笠透いて涼しき目も
松ヶ枝の上に住吉踊見ゆ
ベル鳴つて春雨の窓はなれ
夜振の火集つてゐる積か
敦盛のそばやに坐り花
雛の膳さゝげで長き袂か
掉さして切りに出でたる菖
羅の袖吹き散らす手摺かな

山茶花 長橋ふみ子

春睡抄

隴夜をあゆるめる足袋の白さかな
ききほるる曲は小鍛冶や春の宵
抜け落ちてし東踊の花かざし
ふらここにおすべりに子をみとりけり
佇みて見る芽柳のほふかに
渡りたく見ゆる吊橋や夏の雲
瀬にものを洗ふキャンブの人涼し
黒船を祭る下田の風かを
セル軽く撞くピンポンのはずみけり
もとめ来し趣味の浴衣よ縫ひ急ぐ
どよめきの波に乗り来る神輿かな
蟬の聲のみの眞晝やハンモック
秋風のとなりし朝の化粧かな
暮がて出る山恐し秋立しぐ
やがて出る名月に舟仕立てけり

甚兵衛の渡しはるかや秋の水
髪置や銀杏散りつぐ石だたみ
枝豆や月さす卓のこぼれ水
美しき月見に出たる寒さかな
ひたに行く人影さびし夜の雪
きき澄めば春待つ木木のさゆれかな
暇あれば子に良き父の火鉢かな
更けて戻る女だてらに懐手
寒紅や母に似し子の片ゑく
大利根にゆれかかやける初日かな
とかくしてみだれかるたとなりけり
筆はじめ古りし机に向ひけり
初鏡いささか髪ほつれかな
突き競ふ羽子の音あやにきこえけり
髪かたちかかはりし人と初湯かな

ゆく春 戸谷富美女

葛の花

夕暮や櫻の下に落葉焚く
阿の屋根にさかりの葛の花
睡蓮の返り咲き見て橋に居る
巢の外へ首さしの子かな
天邊の松のみどり朝日かな
石段に鎌倉山の落椿
岩の上若布をさげて海人立てり
爪あげる人のまはり人のよる
鮎さし居る飛ぶ川上の影色かな
穀象の居る米びつ掃除かな
雲迅しちらと見えたる夏の月
街道の真中にあり田植
藪の中にむらがり咲ける鳳仙花
梅の葉の夕立ち風に散るこめ
雷のやみて蝶鳴きそめし

ちらくと散る花びらの光かな
かもし草そろへながらの子守うた
棚藤のほへる下の湯殿かな
萍をを見て立ち居る暑さかな
瀧壺の水を庭木にかけけり
降りたらぬ夕立ちのあと草いきれ
提灯の下に祭の床几かき
自動車をとめて蛙を聞いてをり
橋越えて初夏の廣野に遊びけり
夕立のやみたる空の光かな
雨蛙葎の屋根に鳴きかけり
玻璃越しの庭に沸きたつ雪煙
一雨に廣くなりたる雪間かな
紅白の梅の並びて咲きけり
腰かけてをれば蝶々来りけり

山茶花 松村ぶん

せんやく

鶴 翹 遠 波 初 風 水 あ ぼ ち つ つ
雲 遠 波 お だ や か に 大 初 日
春 浅 玉 葱 の 芽 の ころん じ き に
春 の 燈 や 命 の き わ の う つ ろ の 瞳 (歌舞伎)
春 の 夜 の 鐵 漿 つ や や か に 腰 元 衆 (歌舞伎)
雛 の 手 の か ぼ そ き 影 を 落 し け り
さ く ら も ち 踊 終 へ た る お み な た ち
さ く ら も ち 指 ほ そ へ と 見 ら れ け り
水 暗 し み や ま 紫 陽 花 咲 く あ た り
降 り つ も 色 深 か ま り し 四 葩 か な
額 咲 い て 井 守 ひ そ め る 山 井 か な
ひ な げ し に 蝶 舞 ひ て ひ る し づ か な り
泳 ぐ 子 の こ ゑ 遠 の け ば 行 々 子
夏 蝶 や 小 暗 き 丘 の 古 祠
虹 の 輪 や 瞬 き そ め し 星 一 つ

煎 藥 の 匂 ひ み な ぎ る 暑 さ か な
日 の 下 や 日 輪 草 の た く ま し き
蔭 の 葉 に 篠 つ く 雨 や 澤 涼 し
蚊 帳 釣 つ て 松 洩 る 月 を 待 ち け り
蝸 や 歸 京 せ ま り し 荷 拵 へ
浪 高 う 更 け ゆ く 濱 の 踊 り か な
山 の 湖 紅 葉 の 中 に 澄 み に け り
罇 の かげ 紅 葉 の かげ や 澄 み つ く し (奥日光)
萩 の 咲 く 寺 と な り け り 震 災 忌
月 い よ よ 澄 み わ た り け り 島 の 上
熱 ひ か ぬ 子 の 顔 く ら し 休 暇 明
蟲 な く や け ふ も ひ と り の 夜 の 膳
自 轉 車 の 灯 一 つ 走 る 枯 野 か な
重 ね 着 の 眉 ま し ろ なる 御 僧 か な
擴 聲 器 雪 の 夜 汽 車 の 着 き に け り

さつき 中山芳月女

雜草抄

初芝居蹇へたれど歌右衛門
初芝居手先ふるへし歌右衛門
賑はしし日き手打は狂言初芝居
空青く日も覺ほへず積りけり
春の雪となうて猫の子いぢり
爲す事のなうて猫の子いぢり
いぢりめ飽きて猫の子いぢり
春の夜のまだ燈しある一間かな
花時の夜のぼせ癖なる血かな
美しき夢を抱きて卒業かな
放たる鳥の如くに卒業
島陰を離る船や夕霞
耳にぬる練香や更衣
更衣久遠の處女と誇りけり
わが爲に母はありけり更衣

夜の燈に青き隈もつ薔薇かな
夜のくだち星影青き新樹かな
芝山や兎の糞も露涼し
蚊帳たゝむやころがり出でし朱の枕
相寄りてふれ得ぬ魂や蚊遣香
秋の拾犬が冷き鼻ふるし
秋の藪母に語りぬをみし
高草に鳴きぬる蟲や星今宵
秋の水ふかき空の色吸へる
秋の烟そこはかとなく流れけり
燈に遠く佇てる裸像や夜の秋
鶏頭の燃ゆる鮮人部落かな
魂まぢの燃ゆる門に据ゑたり
落葉道日はしらすと眞晝なる
底深きしはまらの中や雪積る

火星 向川昌子

茅花抄

松過ぎの屋根より落ちし赤き羽子
卒業の校歌をうたひおへしかな
梨咲くと少年ハ一モニカをふけり
げんげ田やさみせんぐさも花つけて
春曉や水をかへたる水枕

鏡忍寺法會

天童に出るそのこどもらやげんげみち
きさらぎの海近かくと汽車の窓
衣裁つや窓明りして春の雪
茅花摘む吾子ゐたりけり茅花原
實家に來ていちち草を摘みにけり
春曉や高く四手綱の上げられて
あたたかや飛石に置く花の鉢
夏だけを人住む家や桃の花
秋の部をひろげてみたる句集かな

秋祭赤きてがらを買ひにけり
櫻紅葉しきりに散るや猿の檻

母よりおくりこしけるに

山芋やふるさとの土なつかしく
秋雨や墓のへに咲くほたるくさ
風邪ひきて姉こもりたる冬至かな

姉逝きて

枯蓮の池のけしきも二七日
三七日の墓参すませし冬木かな
大鷺の檻にあそべり寒雀
冬の海晝顔枯れてゐたりけり
枸杞の實の赤きがこぼれ霜置きし
宮城前廣場に吹雪つのかかな
浪高く雪の渚を打てるかな
水薬に冬薔薇の紅うつり添ふ

春蘭 鈴木眞砂女

水引草

古びたる鏡ぬぐふて春淺し
湯上りの爪の色よし春の宵
話すのもものうき道や草いきれ
汗に夢さめてとどろく胸抱く
胡瓜もみの香がよし母と語りつゝ
澤潟の花の影ゆく目高かな
白鳥に河骨ゆるゝ雨の中
物陰の水引の花さわやか
花火の夜物思ふ心みだれがち
事もなく暮れて夕食や萩の花
墨にまみれし鳥賊のぬめりの寒さかな
編む糸のとぼしくなりぬ寒の雨
枝拾ふに犬つき歩く焚火かな
小刻に走る小路や枯柳
病

粥の後の番茶のにごり春の宵
母と二人きりにて淋しからんと云はれて
尋ねられたり淋しさ誘ふ春の雨
せきせい艶ちたり
明け易く美しき羽もむくろかな
母病みて
青あらし枕氷を軒に干す
眠らんとするに
そと通ふ鈴蘭の香の高きかな
大沼公園
嶋々の紅葉々々に沼靜か
木曾路
山せまりて揺らぐ尾花に夕日かな
老ひし母の縫ふ傍にありて
何本も糸通し置く冬灯かな

高潮 片桐ます子

南へ北へ

掌に 入れし 子雀の 嘴 裂けし かな
地に 裂けて 雪崩の 音の と まりけり
若草の 古草 被むる 膝の 前
聲たて び 鮎か けの 糸を 引く
女郎花に 絶頂を さす ケーブルカ
眼を 衝きて 枯木ば かりの 奔りけり
風光 観衆の 中の 我 眼
猫の子の 頭 大き なる 聲を 出す
衣を選るに 土用の 障子 たてし 婢
粟打の 海に 響き きて 暖か
泳ぐ 首黒く か げれり 秋の 夕
高原の 月を 墜せり 小 さく
獵の 脊の 鶉が まろく 犬の
大霜の おさへし 水の さ 揺が ず箱

吹きすさぶ 野梅に 馬を 放ちけり
木末 渡る 風の まぎれに 轉れり
花さびし 芋焼酎に 聲あ げよ
鳥の 聲 溢れ ぬ 春季 大 掃 除
春風 に 艦を 洗ふ て 出 港 除
墓の 眼が ぐる りと 廻り 蟲を 喰ふ
春曉の 鳥籠 揺つて 戸を あく
五月の 陽隈 なき 灣に 波立 てる
たんぼの 毛の 流れ 来て 躍る 卓
マイク ロホンに グリヤ 震はし 朗々 と
下駄 ぬげば 街の 咫尺に 雷裂く
秋の 蠅 来ぬ 熔岩の 脊の 二人にも
奉迎の 衿を をか さぬ 菊の 前
終日 を 吹雪 に こたへ 玻璃戸 かな
ふりし きる 雪を 見わか ず 大雪 原

水明 佐藤松枝

虎落笛

憂き日々に堪えて淋しや萩を見る
庭ひそと鶏頭に日のあつまれの
我影の水に冷たし暮の秋
大根引く老の夫婦に日温かれ
雪蟲や何か淋しき夕曇り
冬めける風音や灯を消して寝
大寒や月光弾く道一す
春愁や砂に消えゆく潮の
春雁鳴くや温泉疲れに籠る
をみなふと名のみに生きて暮春か
玻璃戸透す新樹や朝の温泉に浸
父を待てる年も終りの子等の顔
師走心何日かは人の戀はれけり
花活けて足る行く年のひとりなり

千鳥わびしも夜々の布團の冷たきに
夕閑古木のしたりの秋に似て
大き子等に我れ良き母や夏休み
瓶の金魚みなあち向いてなだるよ夜
花種を採るひそけさの日流れつ
熱の子に氷割る夜の虎落笛
刈田果へ落つる日祈りたうなり
汽車ひびき夜の繭玉をゆするのみ
山峽のぬきとさに住み寒の餅
郵便夫素通る門の雪踏める
たつき疲れ春夜の夢もなかりけり
日向朽葉のほる甘つぼし子守唄
春浅み人の乳房に兒の寢落つ
ひとすじのふるさと心卒業
春浅し湯殿の窓をわたる蜘蛛

時雨 坂井まつば女

春光抄

永き日や銀座の空のアドバルーン
春の潮いづくへ海洋少年團
下萌や小さき野球選手たち
木の芽透く日は句やかにか
黒髪を命のあんなこ紅椿
花見列車花より早く出でにけり
花遅き今年の蠅も生れけり
夏霧や山のホテルの鳩時計
梧桐の葉のきほひ六月來りけり
フルーツポンチ夏の匂ひを盛られけり
夏の山晴れぬ悲しき遭難者
花言葉忘れし草を合せけり
黒曜石の瞳もつ娘や夏帽子
繪日傘や日本語軽き異人の子
若かりし日の思はるる浴衣かな

夕月の學生町を歩きけり
遠乗りや三四騎霧の碓氷越えり
なにを又泣いてゐる子か障子貼る
パジャマまだ脱がぬ子を呼ぶ芙蓉かな
都戀ふ乙女に咲きぬ稲の花
桐の葉は鼈甲色に冬うらら
今日も亦人をうばひし雪崩かな
舞臺劇はじまる炭をつぎにけり
北風の狂へる夜の炬燵かな
櫓の鈴一度聞ききたき炬燵かな
竹馬や新選組の小隊士
初東風や言門へゆく蒸汽船
船中へ年賀電報うちにつけり
房房とおかつばゆるる手毬かな
鳶口に輪かざりさげて出初かな

ゆく春 宮田みぎは女

しろき衣

父逝く一句
きさらぎや着せまおらする白き衣
春雪の降れば吸はるる砂丘かな
春曉の地震は響らぐ玻璃の水
春愁やパヂヤマの胸の朱の紐
と成りびと話しそめける筑紫の
鴛鴦去ねば波きざみそめ木芽垣
さみだれや句どころありて強からず
「井頭の水」一句——井頭公園吟行會——
若楓溢れる水は飲め愉しめり
泣き呆けの腕のしびれ白薔薇
青葉海真天の日に蝶飛べ
蟲干や少しひもじく衣たゝむ

蕙の花昏れたる墓は窺へる
秋の蚊にさゝれれてみれば痒きかな
秋の蚊にさゝれれてみれば痒きかな
黄おしろひの秋の貌をばつくろなる
岐れ路のひとのおもひに咲く野菊
秋さびの思慕もち酒をあたくむる
繕ひし足袋はくことの親しさは
枯草に狎はくさりのねのひきぬ
雪晴の視野が昏むと小手かざす
冬の夜や足をのばしてねてもみる
厨房夏景四章(無季)
さかんなる水勢に茶を打たせつる
ゆでしものまささを冷えて水にありぬ
壁は黄にカローリ表は繪を添ふる
しづごころ白磁の皿を拭きかさね

句と評論
すゞのみぐさ女

筑紫路

凍雲はひくく麦ふみ居らざりき
かちの巢のかよりて芽吹くさまもなし
雛のものどぼしけれどもつやうかに
そよぐ日にかひなは青しふくろかけ
山蝶の身ぢかにかに馳りふくろかけ
黄沙ふる海かどやかす食堂車
博多帯しめて夕顔つちかへり
玉苗をくばれる人のほとりすぐ
日落ちてなほ砂日傘たてあり
まなかひにめぐる山垣瓜を守る
そこはかたなくギス鳴けりキャンプくむ
泳ぎ女にねむり木花を終りたる
髪ぬれて泳ぎ女の額ぬかひろかりき
すいかつら昆虫採りに高き香を
羽黒蝶ついでり洋樹馳りぬる

ふくるかけ嵐めく雲ながれつ
鯉幟眞夏のごとき日に高く
色鳥に青桐いまだおとろへず
おしみなくともれる窓も霧となる
パツタとびキャンブのあとありありと
ブラタナス青く出水の日は照らす
パンガロー獵解禁の嶺をちかみ
颱風の近いき桔梗瑠璃に澄み
ジャズの窓いつか真くらし焼鳥屋
デパートに月かくされぬ焼鳥屋
枯芝にゆたかな日ざし今日はなく
鴨賣は氷雨のネオンまなかひに
焼鳥屋鐵扉の冷えに火を強む
雪やめばオ里昂かくもうつりぬし
雪片を見てゐる玻璃戸厚かりき

天の川 江村水沙子

北の海のうた

道産子(北海道生れの子)のうたへる

蝦夷の民族の血を受けわれら野に生れし
母の母もその母もみな野に生れし
血に流る野人の叫びわが持てり
たぎり来る血をわが持てり蝦夷の血を
縦横に海ゆきし大祖父の血をわれも
日光浴
裸身まぶし日浴みすべツド純白に
純白のベツドに秋の怖れあり
日浴みするベツドは空に真近なる
日を浴みて琥珀色なる女の裸身
おほらかに秋の裸身を空と觸れ
白壁に秋の裸身を浮彫す
墮ちかゝる空あり秋の晝澄め
言もなし男女は裸身日に曝し

秋日ざしうごめく肺と白きベツド
花のごとし乳房ベツドにまるければ
ずるき編む汁液黒く爪を染め
灯影くらくするき編む手の祖母老いぬ
灯影くらく粗食になれて祖母老いぬ
するき編む祖母の小言を聞きながし
沼の傳説(アイヌ)
相戀ふる男女に沼の秋深く
遂ぐるなき戀なれば沼は魂招く
兄の掌に手をおきメノコ戀の眼を
兄妹の戀秘めコタン秋に入る
タブー犯せし月下の戀を沼は見き
タブー犯せし男女のカヌー今は無し
そのかみの戀秘め沼は秋を深む

土上 坂井道子

著莪の花

子 供 等 に 椎 を 拾 う て 皆 や り
 二 三 日 刈 萩 た ば ね そ の ま ま
 初 雪 の 大 杉 さ ま へ 岐 道
 羽 子 板 を も つ て お ち よ ぼ の つ か ひ か
 羽 子 つ く や こ ぼ く の 音 こ ぼ く
 御 身 拭 旅 の 人 來 て よ ろ こ ぼ
 な ら び ゐ る 尼 の 生 徒 や 御 身
 冬 の 雨 思 ひ が け な き お 客 さ
 静 々 と 祖 師 か き 下 し 御 身
 初 だ よ り 病 氣 見 舞 と な り け
 梅 咲 い て ご か ん れ き と は な り け
 大 方 は 庭 は 梅 林 佛 國 寺
 伊 勢 で 風 邪 ひ い て 歸 り し 主 かな
 生 花 の 會 も あ り け ね 堂 廣
 涅 槃 圖 の 小 さ く 見 え て 堂 廣

笹 鳴 や 西 行 庵 の う ら や ぶ
 涅 槃 圖 の あ る 寺 々 を 見 て ま
 僧 正 ヶ 谷 の 時 雨 に 逢 ひ け
 花 氷 エ レ ベ ー タ ー を 待 ち け
 月 詣 し ま ひ 鞍 馬 と な り け
 こ の 庭 の 枝 垂 櫻 と 山 ざ け
 友 は 皆 老 妓 と な り し 大 石 忌
 芽 菖 蒲 に ぢ つ と し て ゐ る 緋 鯉 かな
 普 請 場 へ 草 餅 う り の 來 て ゐ た
 話 し つ 草 餅 う り の 娘 と 下
 花 冷 に よ き 日 の さ し て 來 り け
 山 の 娘 は 犬 が お 供 や 著 莪 の 花
 じ や ま ま に な る 長 き 袂 や 莓 狩
 お 粗 末 な 籠 を 買 ひ け り 莓 狩
 莓 番 籠 い つ ぱ い に と れ と い ふ

ホトトギス 田畑三千女

夕霞抄

桃色の雲がとぶ家向ふむき霞
春山に登ればとぶ家向ふむき霞
横濱港内三句
春潮や出帆用意ないそがしく
荷揚げして軽き船なり春の風
事務の窓遅日の船は沖にあ
空ツぼの既がならび牧に遅
庭遅日抱き疲れし子を抱
縫疲れ卯の花腐し眺めぬ
夕富士となりゆく畑の袋か
螢火や晝間の家は月に寝
山神に朝が来りぬかつこ鳥
老鶯や降りぐせ付きし傘を負
親よりの繪筆とる身や光琳
うすものに女ざかりの見られけり忌

くさぎと言へば否と言へけり花くさぎ
ふまえたるものが動きし跣足かな
霧とぶや身じろぐ牛に馬遠く
立ち出づるよりつゝまれし蟲の
大いななる幹ぬれならび秋の雨
流れあり櫻落葉をのせて去る
夕鴉や梢に低き日はしてよし
残菊に少しの日向ありてよし
ひもとときし伊勢物語日短か
ふとたちし浮名をよそに松過ぎぬ
遠くから呼びかけ追へる冬菜道
冬日向タンクの長り午後かと思ふ
霜除けに夕べのけはひたちそめぬ
青き枝の並び走れる枝垂梅

玉藻 嶋田みつ子

浅春

トランプの女皇の汚點や梅の宿
大東風に組む鐵骨の火花かな
毬の如く春鴨は寝て雨降れり
鯉の綱真菰に掛け張られけり
若真菰に水路々々舟速し
小鏡に軒の燕の出入りかな
星出ぬ茜さしたる花菖蒲
花菖蒲紙に寫して濃紫
金雀花には崩すや繭の山
避暑宿の掛くる簾も定まり
盆波の岩に榮螺の啼き居たり
夏草に島覆はれて圓きかな
帷子に岩屋の雫擴がれり
ランプの灯より奥多摩の茄子脊負ひけり
繪筆みんな濯げば黒し秋の水

羽織より重なる紋や秋暑く
大根下ろし朝の鬱氣に辛すぎし
落葉吹く夜の大扉なるビルヂング
大時計良夜を針の進むなり
梨削いて泌み々々と見ぬ母の顔
待宵の花伏せて置く井端かな
冷かや河骨沈み花をもつ
玻璃戸立てゝ覗けば庭の秋めける
春近き櫟の色返え々々し
凧に剃刀磨の來る日かな
ストロブに産屋の薔薇黄なるかな
門兵に見下して啼く冬鴉
冬の灯に福白髪抜く妬ましや
今朝伐りし萩二株の時雨降り
黄なる葉に冬暖かき小雨降る

水明 藤井みつ子

松 櫚 抄

注連はるや神も佛も一つ棚
うたはれし名妓老けたり二の替
門を捨てて鼻つけく闇の蛙かな
茶を捨ててに開けし障子や春の
飾りたる小町雛のうれい
敷き馴れし我座布團や春の
庭石に羽織を脱いで落花掃
連翹の一枝を走る松の
枯枝のさし交はしをる椿か
いさゝかの埃を立てる梅に掃
蕨狩して退屈な日を送る
香水を心に心驕れる女か
鼻をつけて束ねし髪や夏の
水うげんや海近ければ手狭でも
風つな

合歡の咲く水邊に蹋み物語
牛は今乳しをぼらるる月の
舟べりに面をかへぬ月見の
天井に芒つかへぬ虫の
客を得てあたる芒の東に秋の
捨てるとを戀ふこともなく障子張る
ふるさとを戀ふこともなく障子張る
彌勒寺の石段にふと秋の
牡丹の白粉はあげぬ秋の
市の音すれど静かや芝枯る
人に従いて下りる徑の落葉かな
蘭蝶を弾かせて年を忘れけり
佛壇の煤を拂ふや南無阿彌陀
夕雲あすの芝居をたのしみ
朝よりも鳴かぬカナリヤ風邪ごもり

駒草 阿部みどり女

リラの花

入學やリラの花咲く寮の春のみち
船發ちて暮る港や春の雁色
春晝やとちし葉の踏みどりと
棧道の馬酔木の花を踏まじとぞ
庭前の浪花うばらも了りな
庭の蝶まゆみの花に紛れつ
夕づゝや泰山木のの花の上
花合歡の大木に入日融くごと
田搔馬洗ふ流れに日落ちぬ
晝顔の枯藻にいのち限りなく
打水の苔より翔ちぬすみれ蝶
葉雫に梧桐の花もまぢり落つ
ハリーゲンベックサアカス
犬が守る留守のワゴンには花いき
蝦とりの對岸の鹿は寝て居りぬ

突堤の時雨に降りぬ航空機
葛たる山家の簷の掛いたらひ
海嬴打ちの月に人影大はいなり
水手洗に月さす杓はかはきけり
湯の瀧にいっつも來る娘や葛の花
乞食の兒は寝る地に栗鬻ぐ
白露の龍舌蘭の色消ぬ
白壁のゆたかなる陽や粃
冬のさるゝ練馬を徒歩の墓詣り
雪の上になまつたき柑子落ちまるび
大年の黄昏るゝ肉の現あらず
柚子の香に沈めば肉の現あらず
繭玉に鶴折りそゆいとまかな
紙芝居臺詞の息吹凍つる日に
杭を打つ槌に其の手に寒の雨

天の川 君島實生子

返り花

温む池めぐりて句座に戻りけり
たんぽよや裏門にあぶる犬の家
いつばいに蟹の子あそぶ濱うら
緑蔭をぬけて流れの早まらぬ
あかぬ扉をおしても見や蟬の時
事しげき婢いとほし避暑の宿
孫の墓に詣づ
手向けたる菊に面影ある如し
夕暮れの小雨にうつす茄子の苗
前山にキヤンプの灯時に見ゆ
芭蕉葉の露のにぼれし額髪
肌寒や落せし櫛に後戻り
新涼や水鏡しに枯野梳る
出迎の提灯下らしや榮螺道
壺焼や眞下し海に榮螺道

纒の張りつたるみ粧つ櫻散る
方丈も稚兒の化粧返り祭
かきつばた小波よせて炭の馬
言傳ての届きたる霧がくれ
教はりし山忽ち霧がくれ
さきほどの人おぼしまに紅葉
我待てば人去りにけり返り花
裏より人も婢報謝す寒念佛
シクラメン咲くか冬籠
豆柿を採らずしまひの温泉宿か
行年や土藏の内よぎる人の誰
月原めできつよぎる人の誰
別れの波にとりし旅籠や秋蚊帳
時化あとの波に出でけり若布刈舟
乳のます蔭いさよけり草刈女

阿蘇の無聲女

阿蘇 福田無聲女

石路の花

春炬燵あふて話もなけれど
春の灯のともりて京に別れけり
春惜しむ文かはしたるそのま
やうやくに常の夕べや蚊遣香
青すだれたとあることのたのし
青すだれかけてゆかりの部屋に
出で入りの柳散る戸となりけり
雨の音をたしみ風邪に臥しにけり
長き夜となりし繪筆をはげみけり
このごろのせはしき中の菊の花
春に似し雨の夜がたり繪屏風に
ちよはよのおはして梅につどひけり
かりそめに病みてたのしき屏風
春灯のわれに病みてたのしき調
時雨もす淋しき温泉に飽かずる

また來むとおもふ時雨の宿りかな
京めぐり紅葉に少し早けり
茶の花の咲いてこのかたもわり
すぎゆきしいろくのこと石路の花
このごろを梅にもうとく暮しけり
旅に出づるわが家の梅にたちけり
丁字の香ほのかにありて覺めにけり
竹めば旅の疲や花の病も
活けかへしくちなしの香の病間かな
梅雨ごもる草のいほりのうす茶かな
今宵また同じ秋灯のもとにかな
すよき折り野菊折りそへゆきにけり
秋ふかくなりしとおもふ燈下かな
落葉するころともなりぬこの窓
句机に落葉のころともなりしかな

かつらぎ
文箭もと女

へんろ抄

ひろくと空のうつれる春の水
杓にひもつけてありけり春の水
話つゝ歩みよけり春の水
新らしき家をめぐりて春の水
向き合ふて濯げる人や春の水
腰かけて杖突いてゐる通路か
かけてある通路笠より雫かな
新らしき道のほとりの通路
街中に登り口のあり春の山宿
子供等におくれ登る春の山
商へる人の後ろの春の山
向き合ふておはす佛や春の山
山門に畑打鉄のもたせぬあ
おひるから一の人もなりぬ畑
ふらこゝの柱のものと草もゆる

掃き寄せし塵の中なる雛あられ
ふく早機を織りゐる山家かな
二日早機に逢へるをたのしみ
簾入や姉に逢へるをたのしみ
機窓の掘り埃の往來か
戻り来て座りしまゝや花疲れ
戻り来て座りしまゝや花疲れ
燕や百姓やめて庭ひろし
ゆすばら梅藪神様をまたぐまじ
鯉幟上りて餘土の村やひろし
雨の日は雨の仕事や麦の秋
はしためと最合傘なる菊の雨
エプロンを替へて隣へ菊を見
隣る家と一つ裏なり柿の秋
おひるから遊ぶ炬燵をしておきぬ

糸瓜 篠崎 幸枝

袖港抄

雛の間や川は洲をうみ洲をうみ
雛の面に潮の映なき一日はみつ
端山邊の霽れたる茶覆ひかりいづ
花圃のひる袋かけある樹もひと
あつまりて金人とは暗と佗ぶ
餘花の日をとざし壁畫の天女老ゆ
田打蟹洲の街騒のかくも鋭き
早苗とり去ぬさのみちに茜さす
簧戸ぬれて花市の人いまだあらず
花市のうつつろ車はかたまたまに
雨なきらみ高草白き蝶吐けり
いなつるみ蛙の聲を蒼くきけり
いしぐれころトの埴はたど灼く
ひたぶるの審判蟬の日を負へり

夕蟬に球はひときをあらたにす
蟬きくはぬ汗のラケツト地に放れ
かなくはあかつき池の照りにきぬ
かなくはあかつき池の照りにきぬ
星の笹舟に憑きつゝ海へいでず
星の笹舟に憑きつゝ海へいでず
小屋芝居灯りぬ遅稲刈りやめず
小屋芝居とかるゝ蝗かれいろに
小屋芝居ときゐる天の瑠璃すめる
銀杏割り洲生れし窓に手を措けり
秋燕かはたれ波は海へふれ
去ぬ燕暮れはなりし汐にふれ
卓に來し夜のはたし眼をしりぬ
霧ぬちの尾すぐし港の冬ぬく
バルーンの尾すぐし港の冬ぬく

天の川 野口雪子

唐太抄

門松や邦人住めぬる露人小屋
書初や好めぬるもの朱短冊
母のうたふ古き龜唄なつかし
女正月束ね髪して風邪ごころ
活け椿やうやく咲いてうす色
春愁やくうれなぬ褪せし鏡か
春愁やうれなじに重き束ね髪
春愁の髪にうなじに花李
相次いで山火起りし二夕嶺か
萍の流れに住まはぬ家や露の中
傾きや秋に似し夜のアイヌ小屋
流星や草の中なるアイヌ小屋
夏霧や草の虫なく畑に母とかな
あかとききの畑に母とかな
露けさの草に沈みし釵かな

草の實や牧童牛に遠くぬる
月蝕を見てゐて露にうたれけり
鳴なくや樺太祭り更けより
のぼり鮭草彩り屠られし
山羊二疋遊べる露の芝生かな
霜枯れの焔に來てゐる兎かな
炭にのせて火種小さくなりけり
重ね着て老ゆる思ひの風邪かな
新巻のうす鹽吹いて焼けて來し
しばれ柿舌凍らせたるうべり
氷上に船を待たせたるか
歸り路をよろこび馳せて犬の
凍海やかかくて老ひたるアイヌ
雪女郎白魔去り行く夜の戸に
ねぎらひの湯へみなやりし除夜の鐘

氷下魚 伊藤雪女

春雪抄

修道院(札幌マリア院)を訪れて五句

おぼろの夜の月の匂ひやマリヤ院
神に生く聖女と春を惜しみけり
邦語巧みな異人も春の宵の人
アマリリス汝は黒髪を秘めて咲く
生くるべき春の愁もなかるべし
春の夜やネクタイ白きピアニス
土出でて子供に國は始まりぬ
紅刷か二月禮者に混りけり
おしなべて女賢し松の花
卯月野や虚無僧何を流し行く
久瀾を笑みつつ冷しコーヒ
夏草を褥に一夜明かさま
心太凡夫がのんどすべりけり
冷かや花なき庭に下り立てる

うそもある世界にまるし今日の月
へヤピンのすべり落ちたる夜寒かな
信じ得ぬことあり秋は暮れてゆく
ねむごろな母の見立てや秋拾
寒天に月凍て着いて更けにけり
ゆく年や佗住む者にお茶の味
蹉いて下駄履き直す日短かき
ゆく年の鉄つめたく握りけり
あかがりや生計細きわが指に
橋小さし雪の奈落の底をゆく
放送の戀の世界や近松忌
元朝や古稀すこやか初母の顔
藻岩嶺は雪を褥や初明り
清らかにおごそかに初日拜みけり
雪冠り來しほろ酔の禮者かな

ゆく春 橋本由紀女

雜吟卅句

海上雲遠

沖遠くたなびく雲や初がらす
ふり袖に傘さしかけぬ春の雪
おもひよらぬ雪春寒うふるも
袖にちる雪はらひすつ餘寒哉
このあたりに既に越路や残る
蝸舟に灯の既ともりたり臘月
ゆく雁や何を曉白き豆腐桶
ゆく雁や野に賑はしき雲雀心
君をまつ隣騒がし猫の戀哉
空家の廣さうにし蝶ひとつ
わが庭の黄いろの花のつどく
彼岸會や縁の日向きをあゆみけ
まぎれ蜂の日向きをあゆみけ
杉の木の下にゆるゆる萩若葉

筍や山科道の朝ぼらけ
着ながし庭のぬればかり初
朝粥や吹井の水のこぼれ居
卯の花や吹井の水のこぼれ居
つらなりし胡瓜畑や朝がらす
曉や星を仕掛花火の音すごし
水のいはる仕掛花火の音すごし
も高原のくはる子果なし天の川
高原のくはる子果なし天の川
虫時雨別れて客と門にたつ
啄木鳥や夕焼雲のかかし
秋深くよせくる鹿のかかし
鳥籠に覆ひ着するか後月の
木兎や自在に着するか後月の
柚子ひとつころがる縁や冬牡丹

木太刀 浦 四三子

若菜

ランプ吊る青田の中の一軒家
ついでにきて露まみれなる小犬かな
子供等を大ぜいのせて舟遊び
どの窓も紅葉してをり山ホテル
自働車に乗つて紅葉の山のみち
頬かむりせる老ばかり蓬つむ
春水をへだてて、鹿とむきあひぬ
花吹雪あびてさわげあひるかな
バス待つつや土筆の袴とりながら
雪洞をとりにつけしより花の雨
話しもし見上げもしつゝ花の下
お通路の荷にもたれ坐す花の
春水を渉る鹿つゞきけり
めいくの百合浸しおく瀧の水
杉の間をつらぬきのぼる瀧げむり

母校を訪ひて

まつぜみやその頃の寮そのまゝに
蟬すゞしどの間も廣き文珠院
草の上落ちてトマトの露まみれ
かたまりて流るゝあひる秋の雨
向き合うて寝てゐる鹿や月の丘
古簾つるして菊に住まひをり
野分やむで厨の山のゝ煤まみれ
鳴たちて紅葉の山にうち向ふ
葬りし後に詣りて虫時雨
別室に渉りゆく紅葉茶屋
あちこちにかゞみ歩きの花摘
よくゆれる大原バスや花づかれ
厠までつゞく雪洞の花の茶屋
花仰ぐ母は眼鏡に手をかけて

山茶花 森田芳子

松籟抄

濱寺の初日もどりは松原を
きだみたる玻璃の七草匂ひけり
簾入はよくて惱みも深かりき
二日灸奥齒をかんで座りる
出代りのよく働けそうな身体つき
出代の氣の合ひそうな面さしよ
出代りの親の後にかしこまり
失望の眼をそれぬ春の鳥
雲雀野や日のうつり來し變電所
手のとゞひく雲の往來や夏の淺茅山
夏の匂ひたたへて雨の淺茅哉
白雨吹いて瀧深々と青葉中
楓若葉瀧は白雨をふきおりぬ

山肌は浴衣の如し著我咲ける
窓涼し酒の匂ひに人と知る
お厨子より微の香走る勿體なき
落柿舎はさしも佗びし柿若葉
射的する二人にぬくき扇風機
ラヂオ消して山河眺めぬ雨の萩
新涼の燈下相寄る秋を哭く
よるべなき我魂悲し秋を哭く
高野山參詣
秋天へ朱の大塔をまのあたり
盆裁に似たる山野や夕霧す
明け掃く部屋へかゝりし冬霞
旭抱く尾根薄墨に冬の朝
龍王の息吹か溪の氷柱哉

黄橙 乾 由 女

常夏の花

輪かざりやの先の近づく大鏡
黄梅や箒の先は懸りぬ春
二の松にシテ遠く放れしつみ菜
いつしかに瀨小原女のひとたむ
葉櫻や八瀬を束ねてかごの衆
棒鼻に蔭を東ねてかごの衆
玉苗のビロイド色に蝶々か
竹垣も結びぬ五月の庭づくと
夏雲や舳に近き島ひと
京扇買ふて麩屋町ぬけにけ
清水や舞子の帯のかきつば
坂本やながむしさけて人の來
睡蓮に雨の輪白くなりにけ
朝じめりして常夏のー花にけ
油蟬梢の風はしづまりかぬ

登り来て富士なつかしき裾野道
先頭や馬上にかざし合歡の花
足元に舟蟲のちる良夜か
よせかへす浪に尾をふり洗ひ
瀧に來てぬれ髪ほどく女か
瀧徑や水引草の金と銀花
葉表はは秋日照るなりくづの
芋虫のさみどりに見し秋の風
うしろより舞ひ來し木の葉音あり
末かかれて淡紫の珠數子か
菜畑や冬めきながら浅みか
公園の眞中通る小春か
夜をこめて來しかな霧の炭車
炭積むや舳かけてある月明り
餅つきや井のはしにあらり

さつき 鈴木よし女

春愁抄

たんぽゝを折ればうつろのひゞきかな
花の窓冷えく腕かな
土手につく花見疲れのかた手かな
をちかたに連なる野火やつくし摘む
歸り來ぬ猫に春夜の灯を消さず
春愁やこの身このまゝ旅ごゝろ
鞍馬路をそれて貴船や夕櫻
虎杖を嚙んでゐし子もいつか去る
そのかみの繪巻はいづこ濃紫陽花
くちなしや青蚊帳つるす京の宿
病間やとる手鏡の梅雨ぐもり
葉櫻や旅愁もまじるみとり妻
初秋やほのかにしぶき林檎食む
別れ路やたゞ曼珠沙華咲くばかり
秋風や輕業の子が頬の紅

秋まつり覗き眼鏡もよそながら
宿の子をかきりひいきや草相撲
金木犀こぼれたまりて雨やみぬ
秋風にやりし子猫の便り聞く
主客たゞあるがまゝなりさわやかに
苦垣に露の袖おく良夜かな
この月よをちかた人にまどかな
山莊や月夜を送る小提灯
一枝の紅葉投げある壁爐かな
猫の眼に海の色ある小春かな
武藏野の名残りの樹々の落葉踏む
風邪熱や苦きがなかの白湯の味
いのち一つ守りあぐねて日南ぼこ
冬ざれの薔薇摘んでわが誕生日
母の年幾つか過ぎし初鏡

ホトトギス 久保より江

去年の句帳より

繭玉に髪一と筋を引かれけり
松の内酒止めし人の縫ふて居る
針山の糸吹く東風に座敷より
鶯や京の小店の座敷よ
此のあたりよき家つゞき松の花
山籠りにかけし草履や春かすみ
つやくと蕨たばねて貫ひけり
白梅やお廊下寒むき里御坊
磯の香の袂にしみる潮干狩り
行春の夜をこめて降る雨の音
病人の深き眠りや金魚置
青芝にたぐり下ろしぬ鯉幟
札糸の青きがのこり夏帽
太と禪八瀬の女房が更
早乙女や化粧床しき笠の内

虫干しや匂ひぬけたる紅絹袋
舌端に己が愚を知らる唐辛子
朝良や水で撫ぜつく亂れ髪
橋に立つ人の顔々大文宇
伸びぬけの竹に風あり星月夜
足もとへ來て居る猫や後物の屋
秋風やいりるく吊りて荒拾せ
膝ぶくれしるて雲水の洩る小春哉
箬の小豆握る手を洩る小春哉
潮音や冬のうらゝか蜜柑山
木枯や海の噴温泉穂みだれけり
厨障子うつ暮れくの落葉か
炬燵抱いて母がさもなう在はしけり
買物をかゝへて顔の寒さか
女皆手を荒らしけり大晦日

懸葵 深元柳子女

春草抄

奥の院一人し居れば時雨冷え
尼寺に聊かつめせる年木かな
春草に子を歩ませ母若し
世にうとく暮せば樂しほ句の秋
残菊にたまあけし別墅かな
一筋の小流澄めたり稻の中
千葉寺の椿は見たりし雪深し
整はぬ庭をながめて春寒し
目の前の海が眩しき日向ぼ
傘の雪漸く白し梅を見
四阿に雪の傘置き梅を見
目刺焼くや遊び汚れて子等戻
春蘭を掘るや六甲又焼く
行合ひし遊び仲間七五三
燧房や煙草の煙り立ちこむる

雪かきに又ちらと降り出でし
ふむ土の雪解濕りに下萌ゆる
燃えさかる野火をうつして雪解水
籬店をかへりみがちに行く子かな
刈りかけてある葦の間の冬の水
お詣りをし其まゝに日向ばこ
他愛なく遊べる子等に日短かや
七夕の帯たれかゝる籬かな
大霜のかゞやく橋の手摺かな
屏風繪の十二ヶ月の行事かな
狐火と覺しきが見ゆ厠窓
霜やけや年端もゆか得水仕事
つややかにかに髪結ひ上げて針納
上諏訪の一夜泊りや蜩汁
咳きてあるじ病み居り梅雨の宿

水手

ホトトギス 岡崎莉花女

水平線

初東風や辨天山の鐘のこゑ
手にあまる手毬抱えていでにけり
春寒のうすれ日さすや青疊
強東風に光る鷗や沖津浪
春潮の雨さそひ來し怒濤かな(大洗)
山笑ふ温泉の里の朝ぼらけ
白焼の串のやまめや風薫る
老鶯や山駕籠下りし立場茶屋
水髪のふかき櫛目や青嵐
朝風に蚊帳さらくと疊みけり
溪若葉筏を組んでゐたりけり(奥水川)
河鹿なくや岩間より水逆しる
沸きいづる温泉の渦や柿若葉
算這ふ温泉けむりや葛の花
夕闇のせままる窓べりや萩の雨

庭笹の廣葉巻葉や露しぐれ
沈む日やと靡くり池藻や秋の水
長々と靡くり池藻や秋の水
岩風呂へ下りる梯子や秋灯(鹽原)
餌サ賣りや一つ置いたる秋灯(稻村ヶ崎)
三方は海の蒼さの月見かな
山宿の湖を前なる良夜かな
みぞるゝや山懐ろの水車小屋
龍の髭うづめつくして落葉かな
深井汲む音のかそけき霜夜かな
船室の窓寒くたゞ水平線
寒晴や小雀日雀の枝移り
寒月や海峡出たる船の揺れ
長々と枯芝土手や寒日
探梅や霰こぼして走る雲

さつき 佐藤綾月女

玲泉抄

直 齋の如き軸淑氣立つ茶席哉
 針の織る雨紙捻の野や薺摘
 紙に織る芥沈しめつつ春や冬
 林泉は芥浴し如つき興福東
 春曉や浅き春なりき興福東
 鶯や雨桶の濃な吐ける笠
 雛の顔冷たさもちつ玲瓏
 日届かぬ坪の内なり露の
 雲が日に消して行く野や艾
 散る花に蹴り冷たし馬度
 夜の花のそれよ白し花馬醉
 早蕨の拳を解かん日朝霞
 餘部の鐵橋高し朝霞

短 夜や句筵の更けたる掛硯
 訃に急ぐ夜筵の更けたる掛硯
 蝙蝠や暮れなぶむ空水色に
 水點の獻茶のむ空水色に
 風見ゆる夜干の衣や蟲の闇祭
 初嵐のよなべ風の吹きけり秋の
 水のよなべ風の吹きけり秋の
 寒々とな霧展ごりぬり十三の
 夢殿の静寂に立ちつ寒さ哉
 白菊や官休に庵の貴人哉
 夜の茶席窓下矢竹霰かう
 冬の雨燈白めく茶席か
 干の湯に浸れ母が念佛
 熱き手爐懷紙被せて撫にけ
 小春日や大佛殿の塀長き

新樹 棚橋玲泉女

實椿抄

山莊や淨むめの鹽の初かまど
こゝろむる冷酒の味や春淺し
春雨の海いかづちに降り止まず
旅人に鴨立つ海霞かな
青藻ある梅雨の蝶螺や盆の上
猛り葉の牡丹となりぬ水無月
灯のもとに愁ほのかや粽解く
一輪の柘榴にけふも曇りけり
山間の水ゆくとこころ青田かな
水浴びて蒼めめる髪や蚊遣香
青蚊帳を高くも吊りてをとめ寝ぬ
大旱の夕日綾羅の衣をとほす
早雲散るや颺子の山おろし
霧の夜や踊子聴きぬ靴の音
秋の夢覺めて記しぬ金曜日

水の霜に鋭き紅や牡丹の芽
鮎の子の霧ふる水に打はねて
めをと應しきびすの砂や秋の潮
引去りしきびすの暑さに藍の花
高空や殻をばぜたる椿の實
ふたの雲のこの暑さなる冬近し
夕映の雲のこの暑さなる冬近し
冬來る櫛の高枝となりけり
地震ありし土に落葉の風もなく
したゝかに落葉する日となりけり
霜とけてひと滴りや冬薔薇
禪堂や凡心にしめて冬壘
あらしかかに松の根をふむ寒鴉
寒の水しづかに潤む硯かな
たまさかによき衣着たる寒さかな

鹿火屋 梅田玲如

芥子の花

母ひとり住むふるさと秋の雨
亡き母の年ともなりぬ門火焚く
忌あけのなかなか悲し芥子の花
あけてなほ喪にあら心接木かな
行く春やしげしげ來れば瞽女もうと
挿しながらほろほろ散るや山櫻
花の茶屋並びあまりて水の山
花の茶屋やすむ間もなく迎へ
長廊下雛を運びてゆきかへ
どこやらに浮かぬ顔して寝冷かな
落つかぬたままの晝寝もいつしか
誰かれの手にわたり子や門涼か
子の顔に青みうつれる茂りかな
月光に浮ぶ土藏や桐の
朝寒の子の起きて來し竈かな

戸じまりの灯に雨風や虫の聲
虫なくや別れていまだ橋の上
我がうたふ守唄淋し夜半の秋
雁なくや氣をたて、發つ日の化粧
よべ病みし今朝發ちや秋の蚊帳
長旅も終りの驛や秋の雨
泣く子見知りて人掻きわけぬ雁夕べ
しばらくは雪車に乗り居るけはひのみ
日の暮るゝせはしきなかや寒の灸
風の子の眠りて頬のまぐれな
大氷柱落ち逆だちし深雪かな
寒念佛遠きくゞりの戸の外
泣き初めの顔をよごりして眠りけり
毬つくやゴム風船は天井に
初春やあるじの船路地圖の上

ホトトギス

山家和香女

笛のおもひ

獅子舞ひは笛の思ひに伏し初日にけり
観世音の階重なれり乞食に影り
元日の階重なれり桃咲ぬに
涅槃會の二基の花に粗野なれど
利休忌の雪に雀は粗野なれど
春燈の茶臼はまわる溢る茶に
ゆらぎ居る梢此方春の雨に
春の風鳥の習性きよて快く
横濱港所見三句
春風の橋を港へ渡りけり
正午着の船見え海に對ふ港
麗に旅具検査所は海に對ふ
菰羅の芽の白きを電の白く飛ぶ
雨の日は雨に育ちて金魚よぶ
零餘子忌の白扇閉づる音きよぬ

待宵の篝焚かせし女人たち
驛長は寝てゐし山の無月かな
笙を聞く秋の祭りの日蔭かな
動かぬ聲はラヂオでありし盆の
泣く聲はラヂオでありし盆の
残る蚊にうす白くありし盆の
秋の雨の雀の顔は白き斑縁
虫の夜は虫となりたる己が耳
皇宮警手にある秋草の徑かな
鶴の聲野山の色に踏み聞
冬近き障子の中賑はへり
音ありて冬田の水の集まりぬ
南天の實の紅ゆらぎおん吉報
犬鷹にあたふる肉は凍り居り

水明 内田 わかな

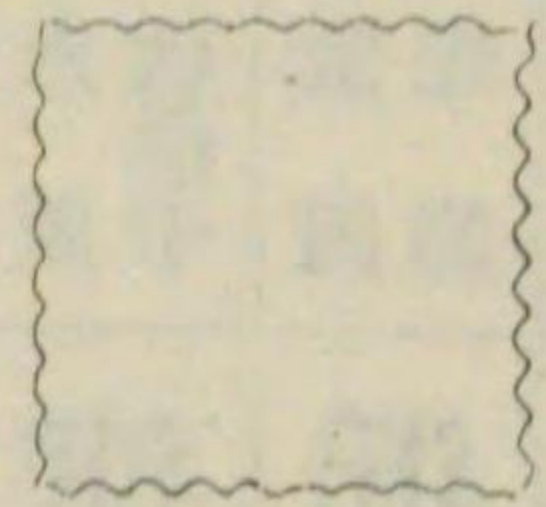
看護抄

恨みなく夫にはべりぬ木瓜の花
逝く春の髪束ねけり看護妻
病む人に香など焚きぬ松の花
サフランに病み次ぐ夫よもどかし
他愛なく物乞ふ夫よ竹の秋
病む人に淋しさ云はず竹の秋
寝苦しきベツトに引けり蜘蛛の
物言はぬ夫よとまし五月閣
床上げを明日にひかへし結の
薬瓶を透けて青葉のベツト
病床のお盆にせまし結の皿
愁ある日を聞かまほしホトギス
病床をはらひてすがしハンモック
明日よりは出務の夫よ夏帽子
醫者去つて氣易く吊りし蚊帳哉

小康のメロンをかこみ夜の卓
血圧計におのゝ汗のかひな哉
見えかくれして夏帽子草に消ゆ
静養のため歸郷
やがて發つ小ものまとめぬ秋燈下
埒もななく子を叱りけり秋の風
秋晴れれや憂悶にしほてる
太けれど何故かは泣くよ秋
山茶花の深さに門戸いや古り
冬ざれや博士を生みし門扇
春永の陽ざしあまねしラヂオ聞
春愁の若き日記よ
ゆきかへて春の夢をつゞりぬ旅日記
置き味のたゞに好もし草を刈る

芙蓉賞 鳥海和佐子

昭和十一年六月三日印刷
昭和十一年六月八日發行



製複許不

編纂者
飯尾謙藏

東京市小石川區江戸町十八

印刷者

並 河三郎

東京市澁谷區猿樂町五一

東京市小石川區江戸町一八

發行所

交 蘭 社

振替東京四〇二七九番
電話小石川(85)三一五一番

女流俳句集

定價一圓五十錢

好評評々たる俳書類

水原 秋櫻子	水原 秋櫻子	水原 秋櫻子	水原 秋櫻子	飯笏 蛇	岩郎 九	武塘 鶯	吉田 冬葉
現代俳句季語解	俳句の本質	俳句になる風景	句集新樹	連作俳句集	近代句を語る	芭蕉文集 <small>の詳解と鑑賞</small>	鳴雪俳句研究
横綴總布上製美本 函入葉付忽八版	四六總布上製美本 好評 第五版出づ	四六總布上製美本 風景と生活を解く	四六版和紙表裝龍子 畫伯裝幀美本	四六版紙裝美本 函入り全一册	四六版總布上製美本 上製函入全一册	四六版總布上製美本 上製函入り全一册	四六版鳥子紙表裝 美本口繪寫眞入
一、八〇〇	一、〇〇〇	一、二〇〇	一、五〇〇	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇

交蘭社發行

好評評々たる俳書類

小川 千	伊東 月	永直 義	上原 綠	新井 聲	横山 青娥	西谷 勢之介	交蘭社 特輯	交蘭社 編輯
新纂俳畫法	俳句になるまで <small>(續)</small>	芭蕉の句作心境を解く	俳句の添削と其實例	俳壇目安箱 <small>側面裏面</small>	一茶の俳句と其一生	一茶の人間味と俳句	俳句浄書帖	季語附俳句手帖
菊版總布特美上製 色刷寫眞繪八十葉	四六版紙裝恒友畫伯 裝幀美本全一册	四六版總布上製美本 挿畫十五葉添附	四六版紙裝美本十黃 畫伯挿畫函入	四六版フランス綴 癖三醉畫伯裝幀	四六版總布上製美本 函入第五版出づ	四六版總布上製美本 函入全一册	四六版總布上製美本 製兩筆兼用美本	袖珍垂總布上製 オフセット印刷
二、〇〇〇	一、二〇〇	一、三〇〇	一、二〇〇	一、七〇〇	一、五〇〇	一、四〇〇	一、九〇〇	二、二八〇

交蘭社發行

現代綜合大句集

◎忽ち一大好評と共に再版又再版出づ！
◎過去の謂有編纂句集を驅逐して燦然と輝く二萬句集

飯田蛇笏先生の御批評文

現代綜合俳句集なる名に於て一集が編まれることを交蘭社主から聞いて、若干の興味を持つてみたところ、愈々出来上つて贈られてみると、成程立派に成功してゐる。由來この種濫發される群書は、綜合、模範等の冠詞をひどく濫用する慣ひであるが、此の編著に於ては、夫れが比較的嚴正に保たれてゐることを一讀の間に感じた。眞に全俳壇の縮圖であるに違ひない。

而も自由律作品の載録に就てこれを一排してゐるが如きは、その硬骨、賣らん哉主義を蹴つた、相當なる見識を看取るに足るものがある。青年にとつて座右の好伴侶でもあらうし、冊子の頃合漫歩携帶にも宜しからう。壯なる制作慾に燃ゆる新銳諸氏の參考書として推賞し得るものである。

横綴總布上製美本
函入全六百五拾餘頁
口繪紙色刷寫眞版入
實價金一圓五十錢
送料金十二錢
總皮天金特製本
金二圓 送十二錢

交蘭社發行

島田青峯著

自句自釋 海

光

四六判上製美本
函入送料十錢
定價金一圓二十錢

忽ち好評の新著

俳句が五七五の十七字音詩である事や、季題が大切である位のこととは、現代の世の中では、小學生でも知つてゐる。それを繰りかへしく刊行されてゐたのが「俳句作法」や「作り方」書の類である。本書はその事の徒勞さを思ひて、ひとつの新しい試みとして「自句自釋」による作り方の方法を一般初學者に與へようとした。著者が如何なる場合に如何なる態度を以て、如何なる感情のもとに句をもつたかといふ事は、本書の内容を熟讀する事によつて自ら納得され、それをまのあたり體驗し苦作してこそ眞の上達を期し得らるゝで有らう。

◎内容全部書きおろしの名文章。

水原秋櫻子著

自句自釋 吾が俳句

四六版上製美本
函入送料十錢
定價金一圓二十錢

東京市小石川區 交蘭社 振替口座 二七〇九番 東京市小石川區 八十八番

東京交蘭社發行

東京市小石川區江戸川町一八（電話小石川）
振替口座東京四〇二七九（三一五一番）

俳句新聞

毎月二回發行 一日、十五日

一部金六錢、一ヶ月金十二錢、半年金六十錢、一年金一圓十錢、保存用綴簿必要の方は實費二十錢送料十錢

會員募集

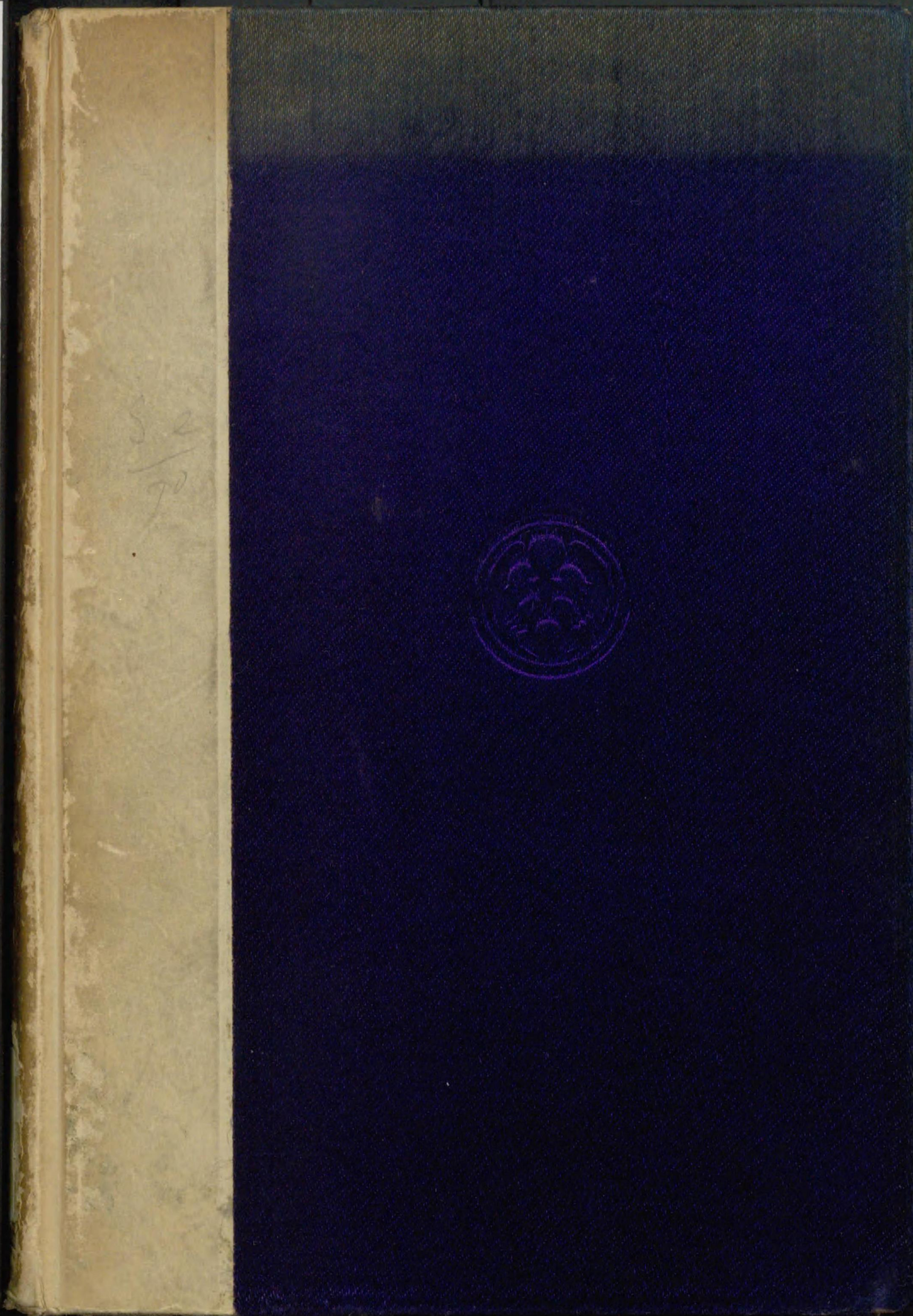
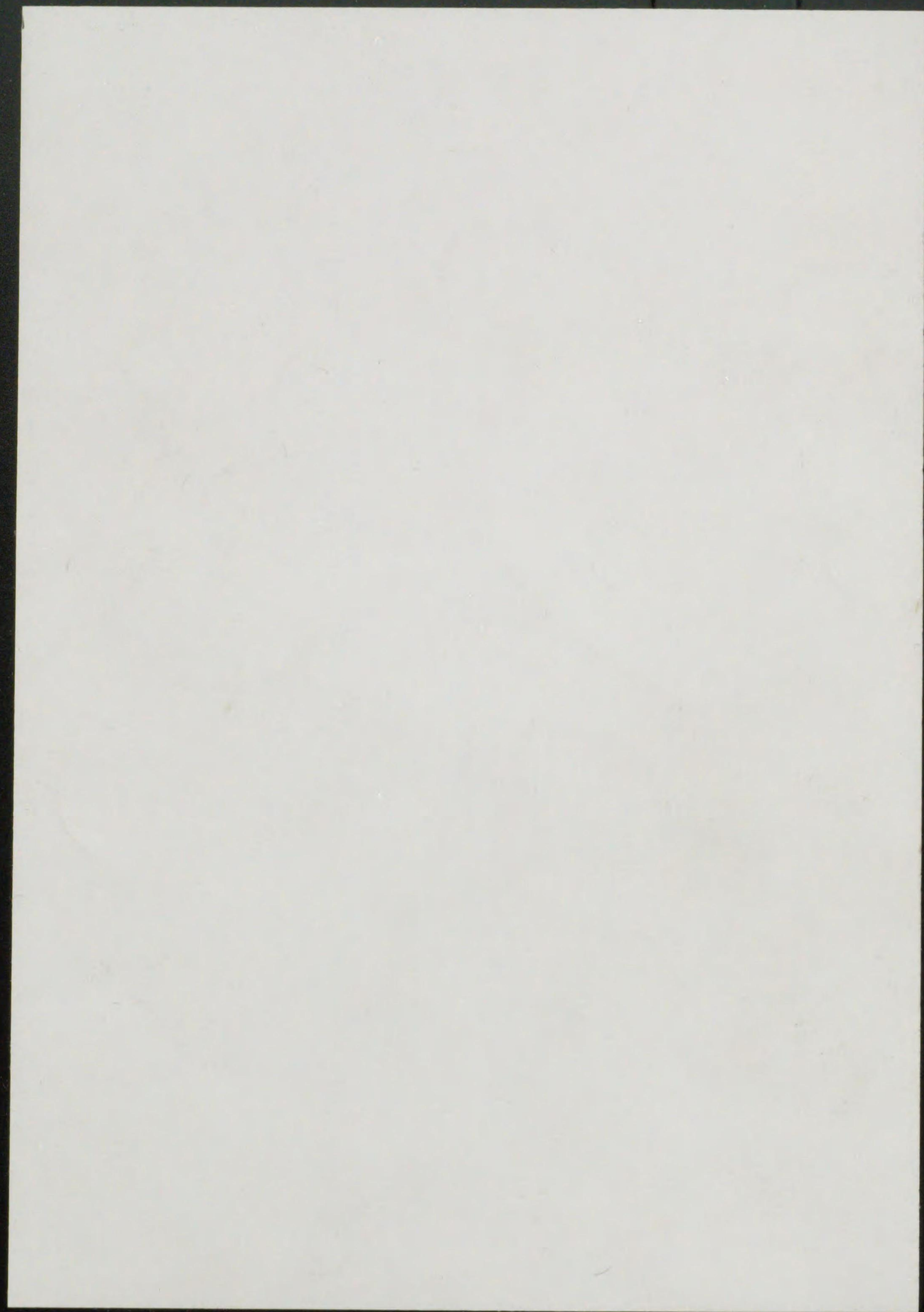
本誌は全俳壇の公器として又全俳句人の公平自由なる新壇上として、誰人の威壓牽制を受けることなく、偏狹なる黨派的結社感情を超越して悠々自適、俳句文藝の奥道に參ぜむとするものである。

本誌の趣旨と使命に共鳴する目覺たる俳人各位の參加日に激増し、將に昭和俳壇の慧星的出现として、全國五十萬の新舊俳人間を堂々風靡せむとしつゝあり。幸に斯道を語り句を作りつゝある各位は、須らく公平無私なる本誌を自の試壇とし、且つ全國普遍、最多數に愛讀さるゝ本誌に依りて有無名の多大なる同好者にアツピールする事の如何に意義深きかを思ひて速に貴下の讚加あらむ事を期待する。

かゝる本誌を通じて、あらゆる俳壇の情勢を洞察し常に自己の俳句生活に於ける立場を價值づけて行くべきであり、本誌のモットーとする「全俳壇にそつくりそのまゝ與へられた「俳句新聞」として思ふがまゝに、自己の主義主張又は作品等を發表されむことを乞ふ。

—— 募集小規により投句寄稿を歓迎す ——
—— 支部規定は申込により送呈す ——

688
135

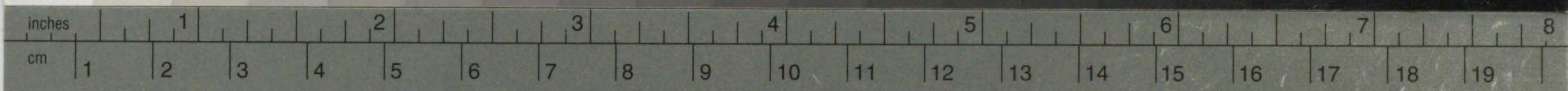


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

